

第12回 東夷伝(7) 倭人2. 邪馬台国への道



I. はじめに

倭人伝登場

II. 邪馬台国へ至るルート

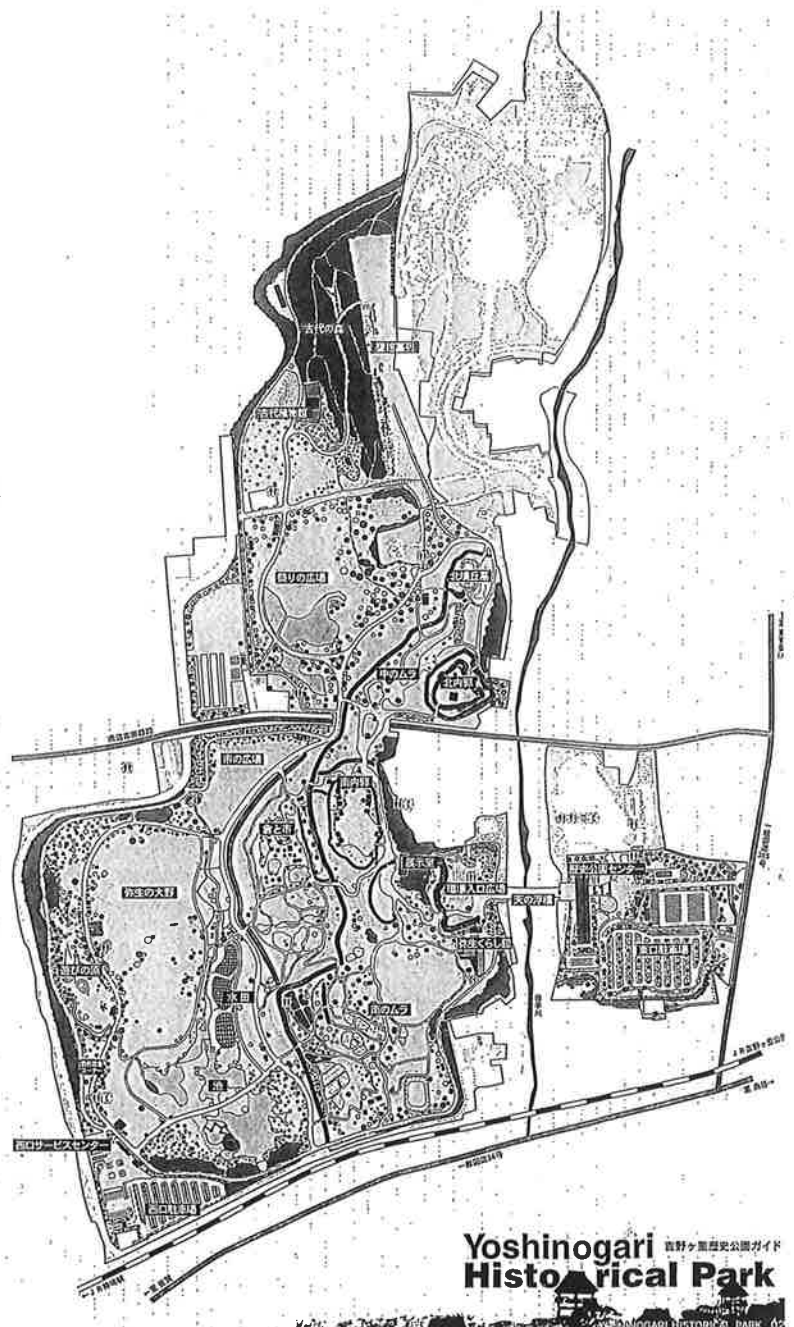
- (1) 帯方郡から狗邪韓国へ
- (2) 対馬国から伊都国へ
- (3) 奴国から不弥国へ
- (4) 投馬国から邪馬台国へ

III. 邪馬台国問題解決への道

- (1) 烏丸・鮮卑・東夷伝所載の意味
- (2) 史料批判の徹底
- (3) 地域研究の推進

IV. おわりに

邪馬台国問題の学術化



女王国から北にあたる国々については、その戸数や道のりをほぼ記録することができるが、それ以外の方向につらなる国々については、遠くへだたっているため、詳細を知ることができない。女王国のさらにむこうには、斯馬国^{しま}があり、つづいて已百支国^{いひやくし}があり、つづいて伊邪国^{いや}があり、つづいて都支国^{つし}があり、つづいて弥奴国^{みぬ}があり、つづいて好古都^{こうこ}があり、つづいて不呼国^{ふこ}があり、つづいて姐奴国^{そぬ}があり、つづいて対蘇国^{たいそ}があり、つづいて蘇奴国^{そぬ}があり、つづいて呼邑国^{こゆう}があり、つづいて華奴蘇奴国^{かぬそぬ}があり、つづいて鬼国^きがあり、つづいて為吾国^ごがあり、つづいて鬼奴国^{きぬ}があり、つづいて邪馬国^{やま}があり、つづいて躬臣国^{きゆうしん}があり、つづいて巴利国^{はり}があり、つづいて支惟国^{しゐ}があり、つづいて烏奴国^{うぬ}があり、つづいて奴国^ぬがある。ここで女王の領域は終る。その南に狗奴国^{くぬ}があり、男子が王となっている。その長官は狗古智卑狗^{こちひこ}と呼ばれ、女王の支配は受けていない。帯方郡から女王国までは、一万二千余里。

(中略)

女王国から東に一千余里の海を渡ると、別の国々があつて、それらもみな倭と同じ人種である。さらに侏儒国^{しゆじゆ}がその南にあり、その者は身の丈が三、四尺、女王国から四千余里の距離にある。裸国^{らこく}・黒齒国^{こくし}がさらにその東南にあり、船で一年の航海をしてそこに行きつくことができる。いろいろな情報を総合してみると、倭の地は、大海中の孤立した島嶼^{とうしよ}の上にあつて、国々が連なったり離れたりしながら分布し、ぐるっとめぐると五千余里ほどである。

り。その土地は山が険しく深い森林が多く、道はけものや鹿の通り道のようにである。千余戸の家があり、農地はやせていて、海産物を食べて生活をし、船に乗って南や北に海を渡って穀物を買ひ入れてくる。さらに南に向って瀚海かんかいと呼ばれる一つの海を渡り、千余里を行くと、一大国（一支国）につく。そこでも長官は卑狗、副官は卑奴母離と呼ばれている。広さは四方三百里ばかり。竹や木が生えやぶが多い。三千ばかりの家がある。田畑もなくはないが、農耕だけでは食料の自給ができず、その人々も南や北に海を渡って穀物を買ひ入れている。さらに一つの海を渡り、一千余里を行くと、末盧国まつろにつく。そこには人家四千余戸があり、山と海にはさまれた海岸地帯に住んでいる。草木が繁茂して、道のあるいていると前を行く人が見えない。魚や鰻あわびをとることに巧みで、水がいかにかに深かろうとも、潜って取ってくる。東南に陸路を五百里行くと、伊都国いとにつく。その長官を爾支じきといい、副官を泄謨觚せつばこ・柄渠へいきよとこいう。千余戸の人家があり、代々王がいて、ずっと女王国の支配を受けてきた。帶方郡からの使者が往き来をする場合、いつもここにとどまる。東南の奴国ぬまでは百里。その長官は兕馬觚じばこと呼ばれ、副官は卑奴母離と呼ばれて、二万余戸の人家がある。東に進んで不弥国ふみまで行くには百里。長官は多模たもと呼ばれ、副官は卑奴母離と呼ばれ、千余戸の人家がある。南の投馬国とうままでは、水路で二十日かかる。その長官は弥弥みみと呼ばれ、副官は弥弥那利みみなりと呼ばれ、五万余戸ほどの人家がある。南の女王が都している邪馬や耆ま（臺たい）国までは、水路十日、陸路一カ月がかかる。長官には伊支馬いしまがおり、その下に弥馬みま升しょう、その下に弥馬みま獲かく支、その下に奴佳ぬか鞮ていと呼ばれる官が置かれ、七万余戸ほどの人家がある。

華奴蘇奴國，次有鬼國，次有爲吾國，次有鬼奴國，次有邪馬國，次有躬臣國，次有巴利國，次有支惟國，次有烏奴國，次有奴國，此女王境界所盡。其南有狗奴國，男子爲王，其官有狗古智卑狗，不屬女王。自郡至女王國萬二千餘里。

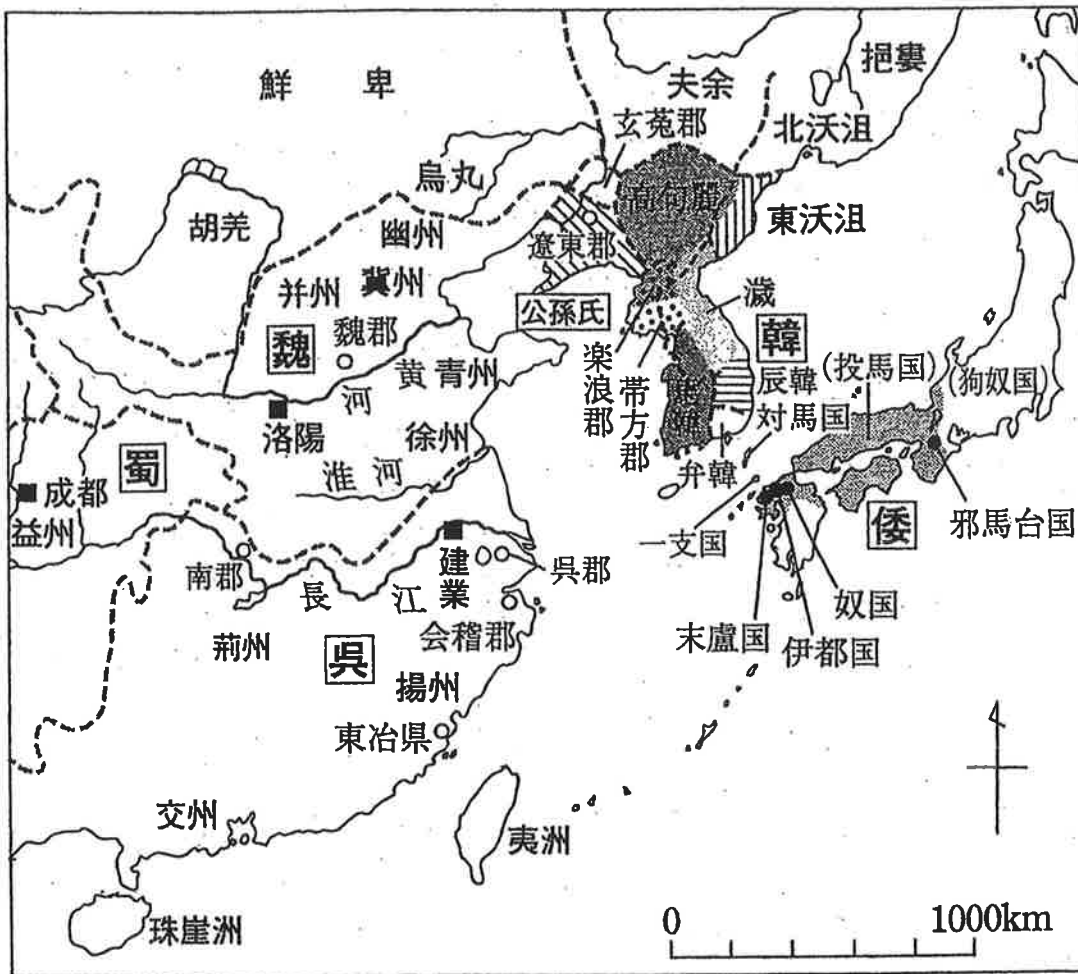
(中略)

女王國東渡海千餘里，復有國，皆倭種。又有侏儒國在其南，人長三四尺，去女王四千餘里。又有裸國、黑齒國復在其東南，船行一年可至。參問倭地，絕在海中洲島之上，或絕或連，周旋可五千餘里。

倭人^{わひと}は、帶方郡の東南の大海の中におり、山がちな島の上にそれぞれの国^{こく}邑^{ゆう}を定めている。もともと百余国があつて、漢の時代に中国へ朝見に来たものがあつた。現在、使者や通訳の往来のある国が三十国ある。

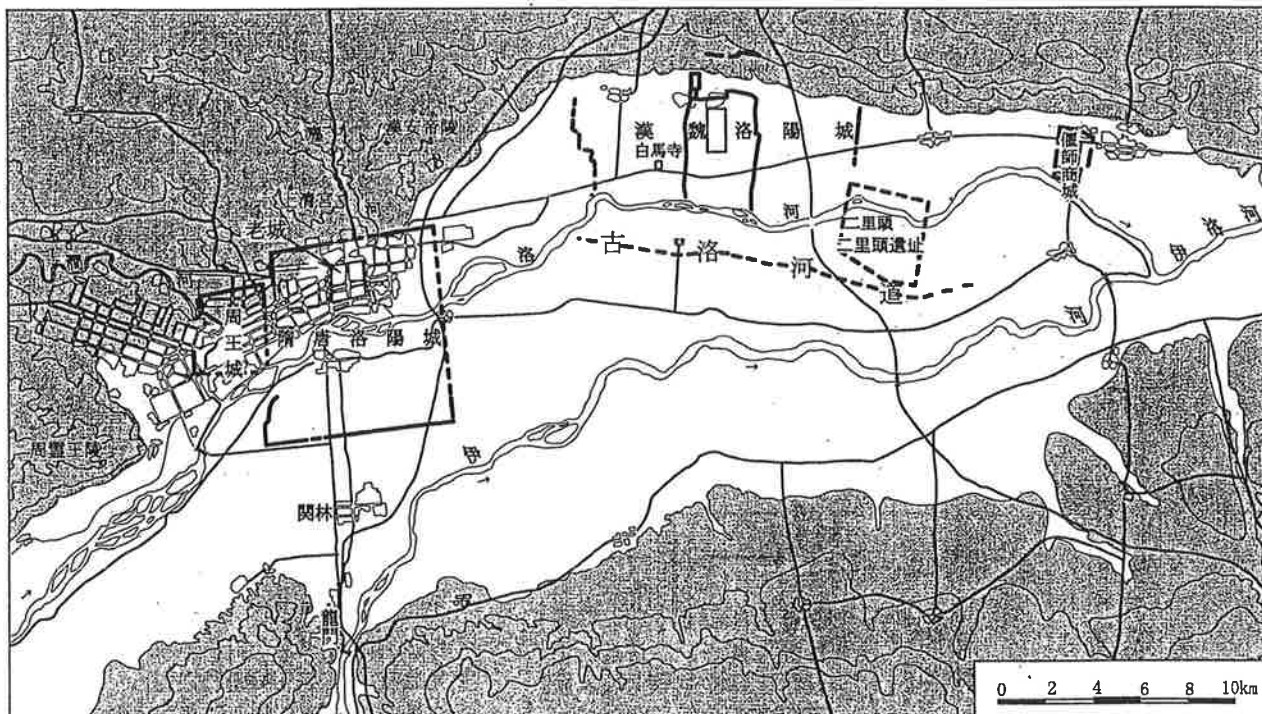
帶方郡から倭に行くには、海岸にそつて船で進み、韓国を経、南に進んだり、東に進んだりして、倭の北の対岸である狗邪韓^{くやま}国にいたる。そこまでが七千余里。そこではじめて「海岸を離れて」一つの海を渡る。その距離は一千余里。対馬^{つしま}国につく。その長官は卑狗^{ひこ}と呼ばれ、副官は卑奴母離^{ひなもり}と呼ばれる。四面を海にかこまれた島に住み、広さは四方四百里あま

倭人在帶方東南大海之中，依山島爲國邑。舊百餘國，漢時有朝見者，今使譯所通三十國。從郡至倭，循海岸水行，歷韓國，乍南乍東，到其北岸狗邪韓國，七千餘里，始度一海，千餘里至對馬國。其大官曰卑狗，副曰卑奴母離。所居絕島，方可四百餘里，土地山險，多深林，道路如禽鹿徑。有千餘戶，無良田，食海物自活，乘船南北市糴。又南渡一海千餘里，名曰瀚海，至一大國，官亦曰卑狗，副曰卑奴母離。方可三百里，多竹木叢林，有三千許家，差有田地，耕田猶不足食，亦南北市糴。又渡一海，千餘里至末盧國，有四千餘戶，濱山海居，草木茂盛，行不見前人。好捕魚鰔，水無深淺，皆沈沒取之。東南陸行五百里，到伊都國，官曰爾支，副曰泄謨觚、柄渠觚。有千餘戶，世有王，皆統屬女王國，郡使往來常所駐。東南至奴國百里，官曰咒馬觚，副曰卑奴母離，有二萬餘戶。東行至不彌國百里，官曰多模，副曰卑奴母離，有千餘家。南至投馬國，水行二十日，官曰彌彌，副曰彌彌那利，可五萬餘戶。南至邪馬壹國，女王之所都，水行十日，陸行一月。官有伊支馬，次曰彌馬升，次曰彌馬獲支，次曰奴佳鞮，可七萬餘戶。自女王國以北，其戶數道里可得略載，其餘旁國遠絕，不可得詳。次有斯馬國，次有已百支國，次有伊邪國，次有都支國，次有彌奴國，次有好古都國，次有不呼國，次有姐奴國，次有對蘇國，次有蘇奴國，次有呼邑國，次有



3世紀前半の東アジアの政治構図

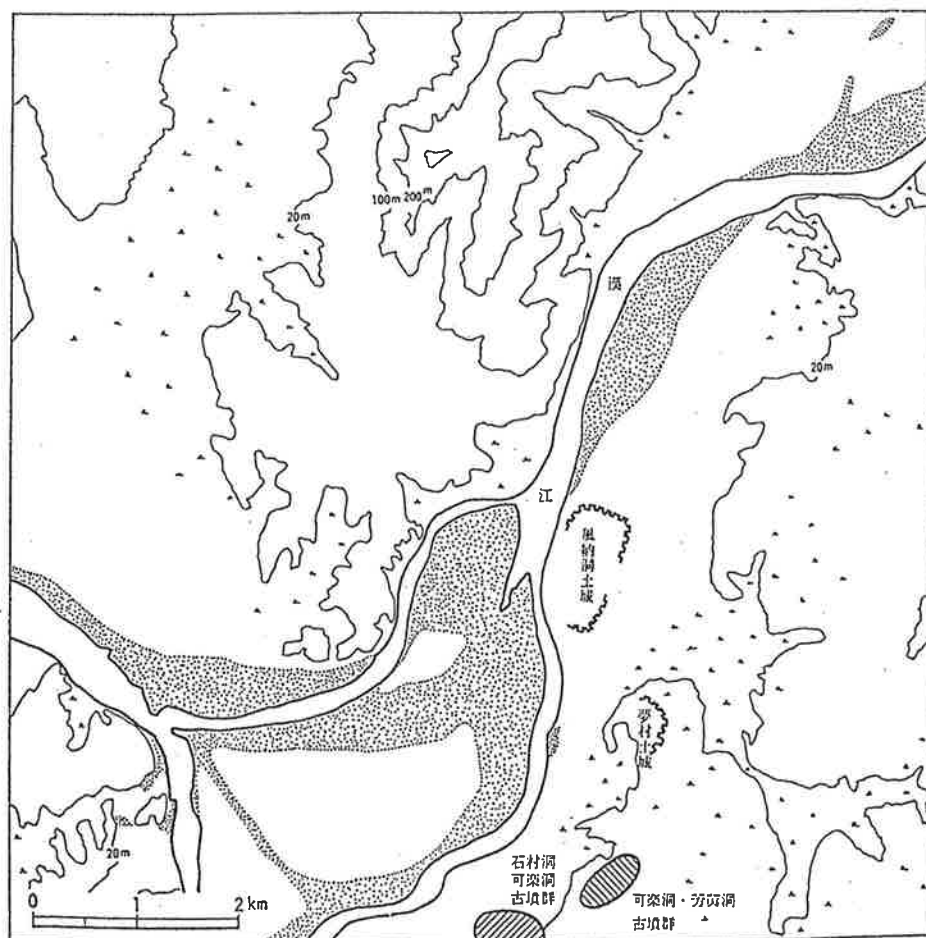
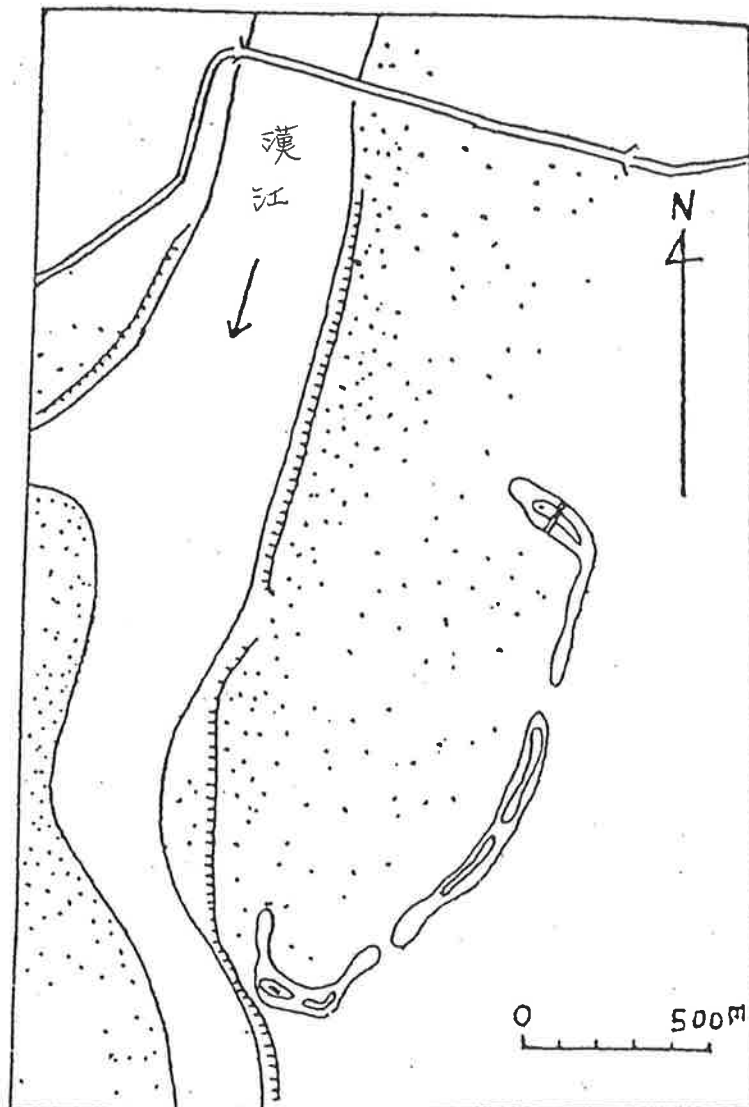
寺沢 薫, 2000『王権誕生』日本の歴史の講談社

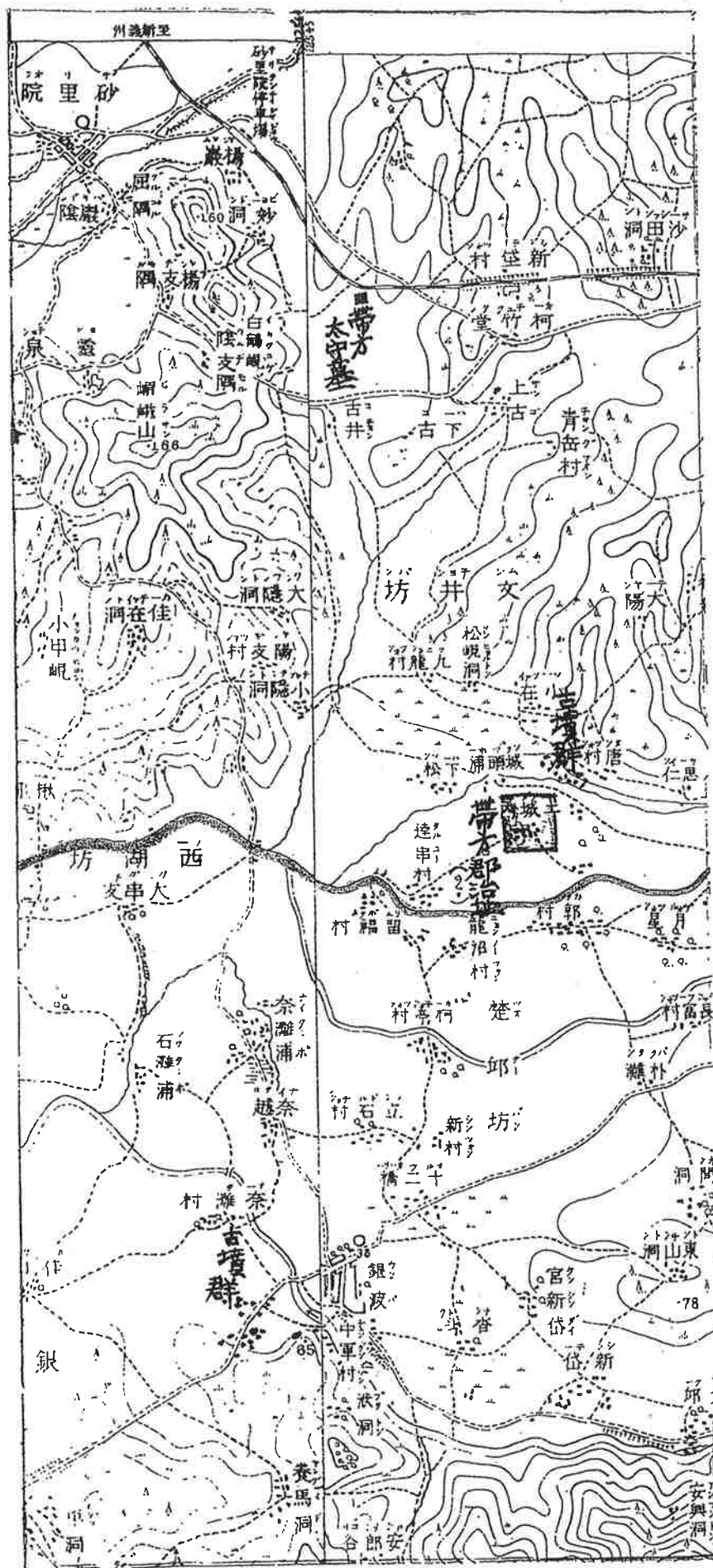


伊洛盆地の歴代都城遺址の立地－夏二里头遺址・殷偃師城・周王城・漢魏洛陽城・隋唐洛陽城

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 2008『よみがえり古代の大和』東京新聞

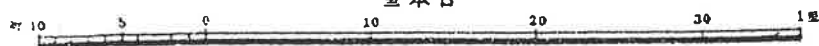
関中盆地と伊洛盆地－長安と洛陽の立地－(妹尾 2005)

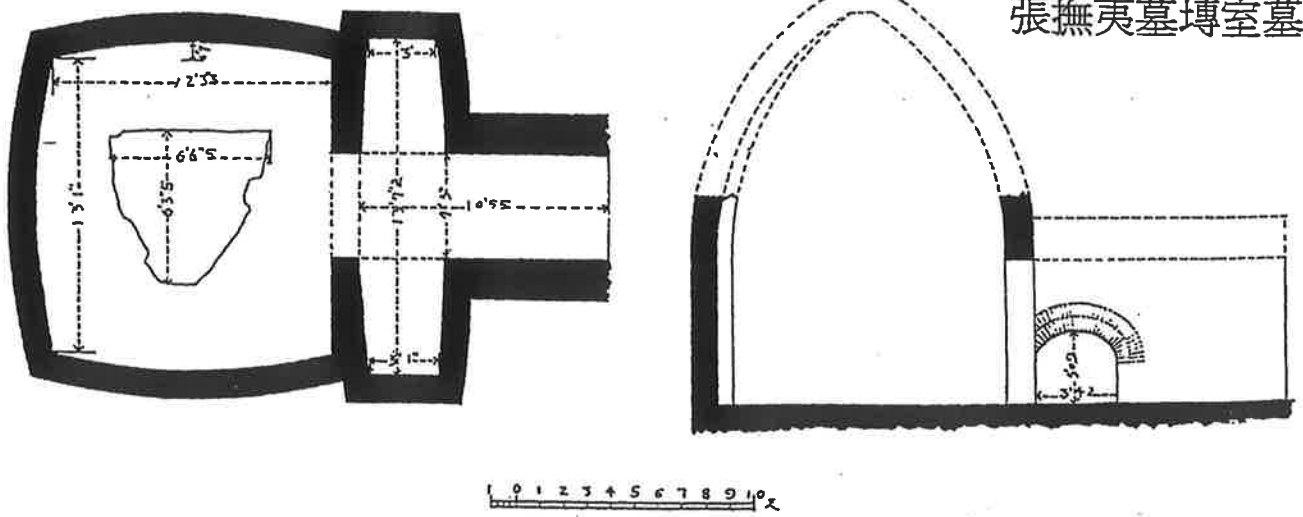




尺之一分万五

里本日

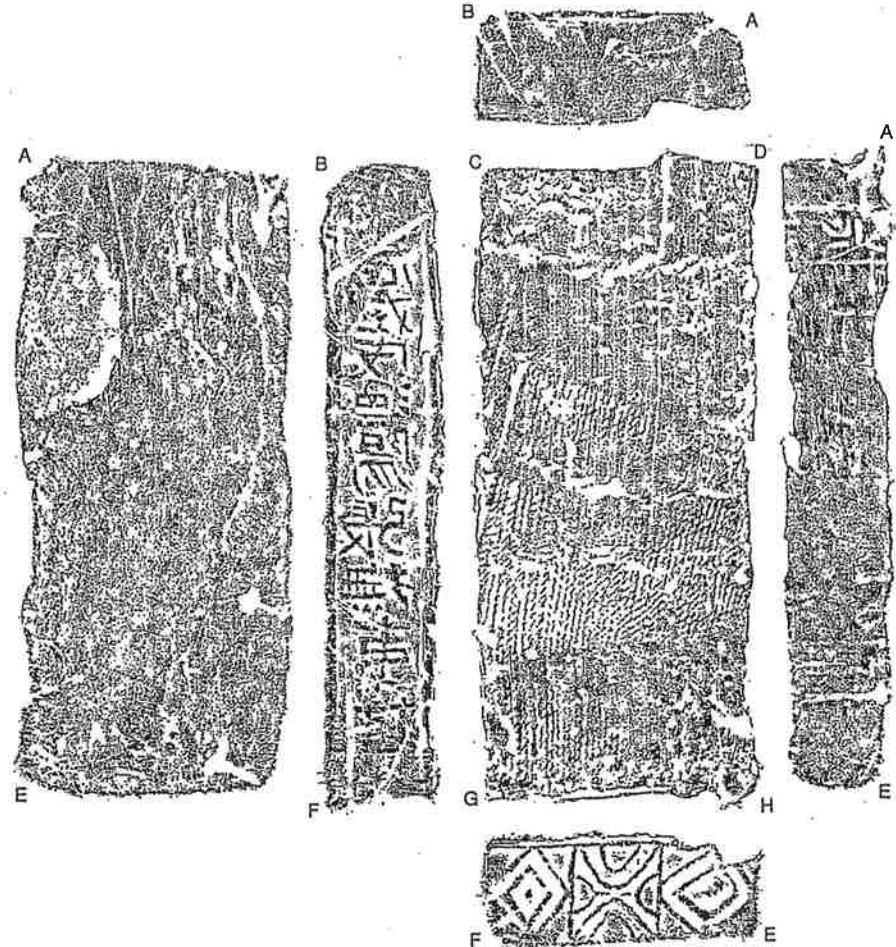


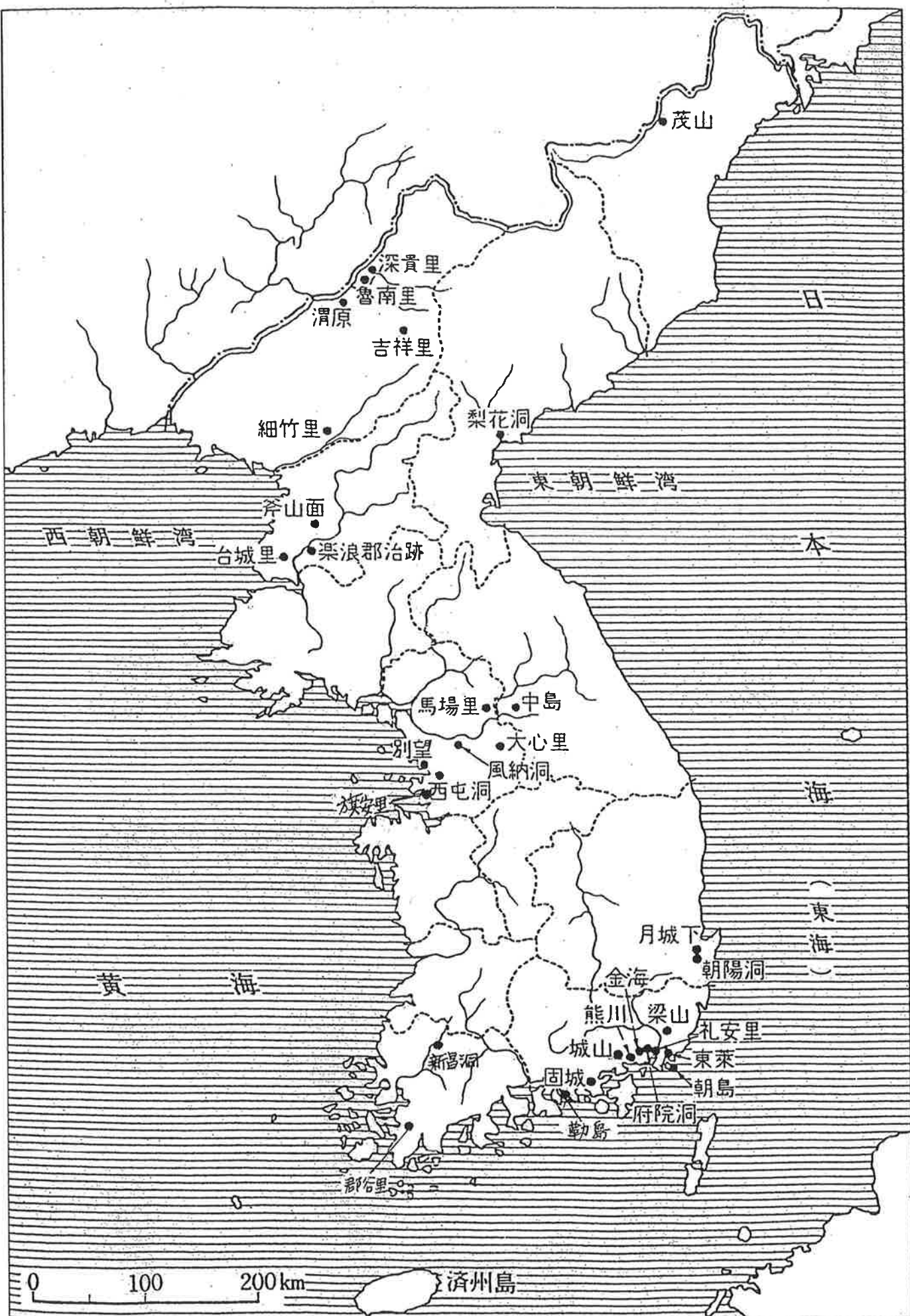


北
黄海道鳳山郡文井面胎封里第1号墳出土の戊申年銘塋

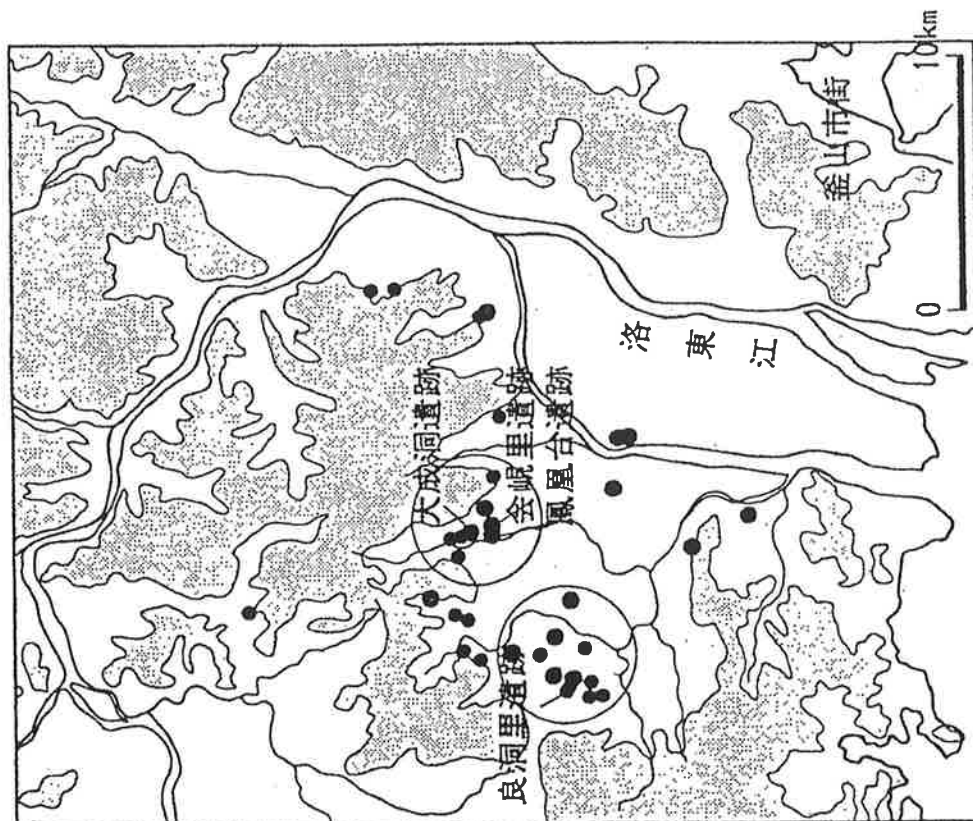
- (A) 類「大歳在戊漁陽張撫夷塋」
- (B) 類「大歳戊在漁陽張撫夷塋」
- (C) 類「大歳申漁陽張撫夷塋」
- (D) 類「八月廿八日造塋日八十石酒」側銘、「張使君塋」上の小口銘
- (E) 類「趙主簿令塋勸意不臥」側銘、「張使君塋」上の小口銘
- (F) 類「哀哉夫人奄背百姓子民憂慙 夙夜不寧永側玄宮痛割人情」側銘、「張使君」上の小口銘
- (G) 類「天生小人供養君子千人造塋以至 父母既好且堅典齋記之」側銘、「使君帶方太守 張使君塋」上の小口銘

竹谷俊夫、二〇〇八年「張撫夷墓塋の觀察所見」
正確に試器と信仰の同成社



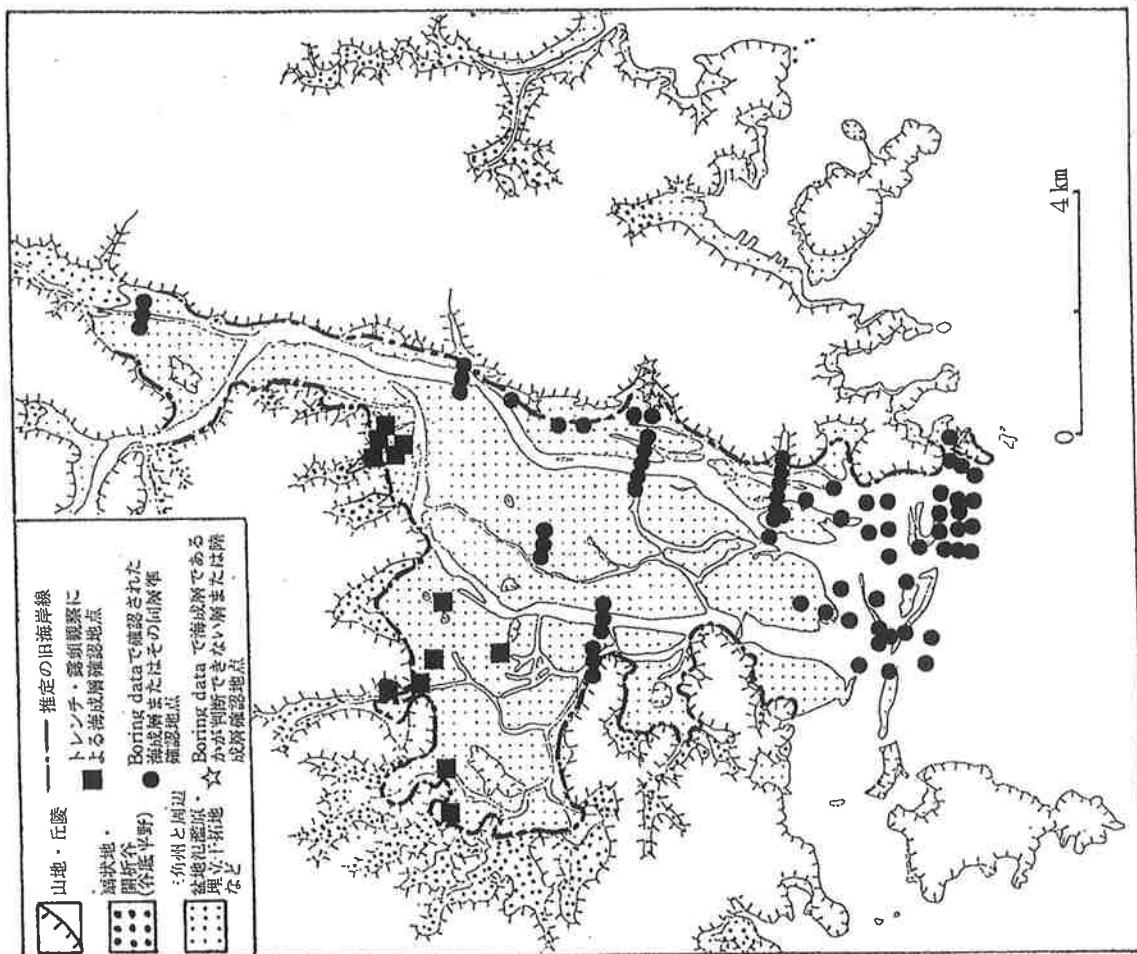


原三国文化主要遺跡分布図



金海地区の遺跡(原三国期前後)分布

『月刊 歴史手帖』20-6, 1992 より



金海地域における海成層の分布と推定の旧海岸線

潘鍾夫・郭鍾哲(中島達也記), 1993『洛東江河口金海地域の環境と漁撈文化』『古文化叢書』第31集, 九州古文化研究会

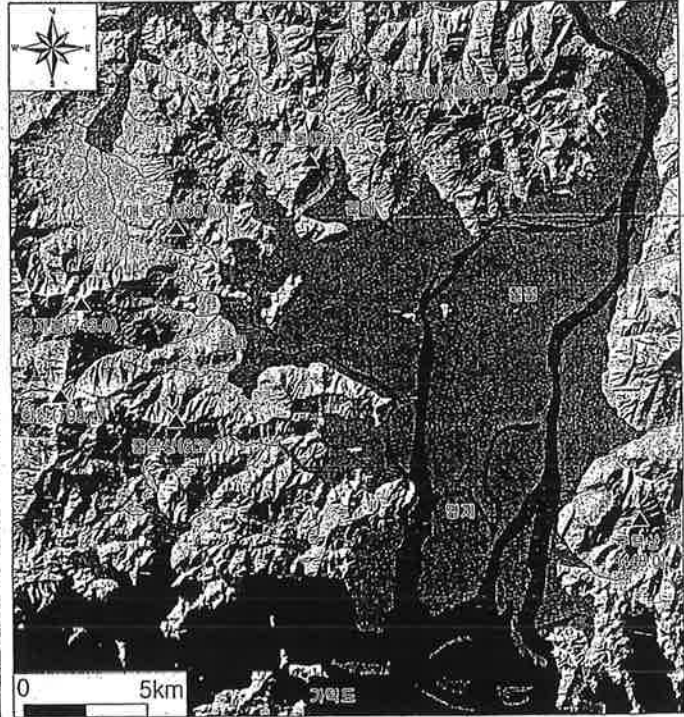
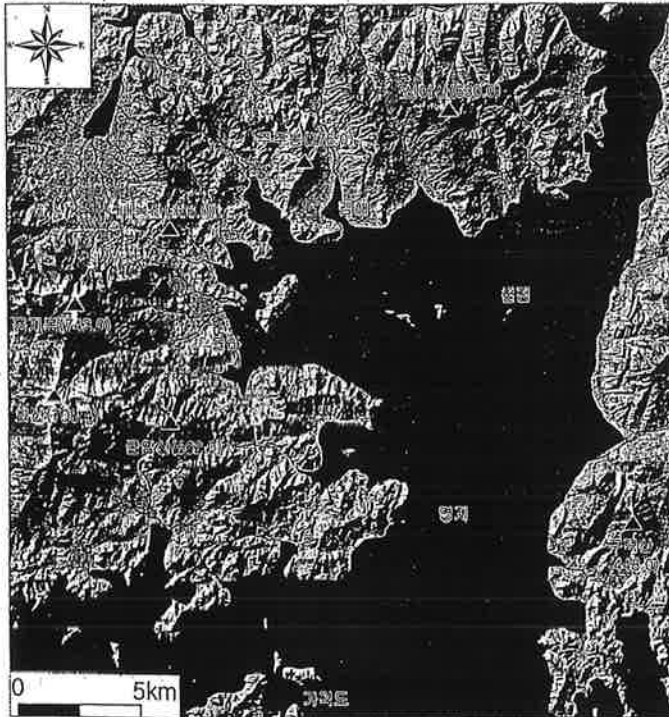
古海面期

現在의 金海地域地形圖

고해면기(6,000~1,800.yrBP)

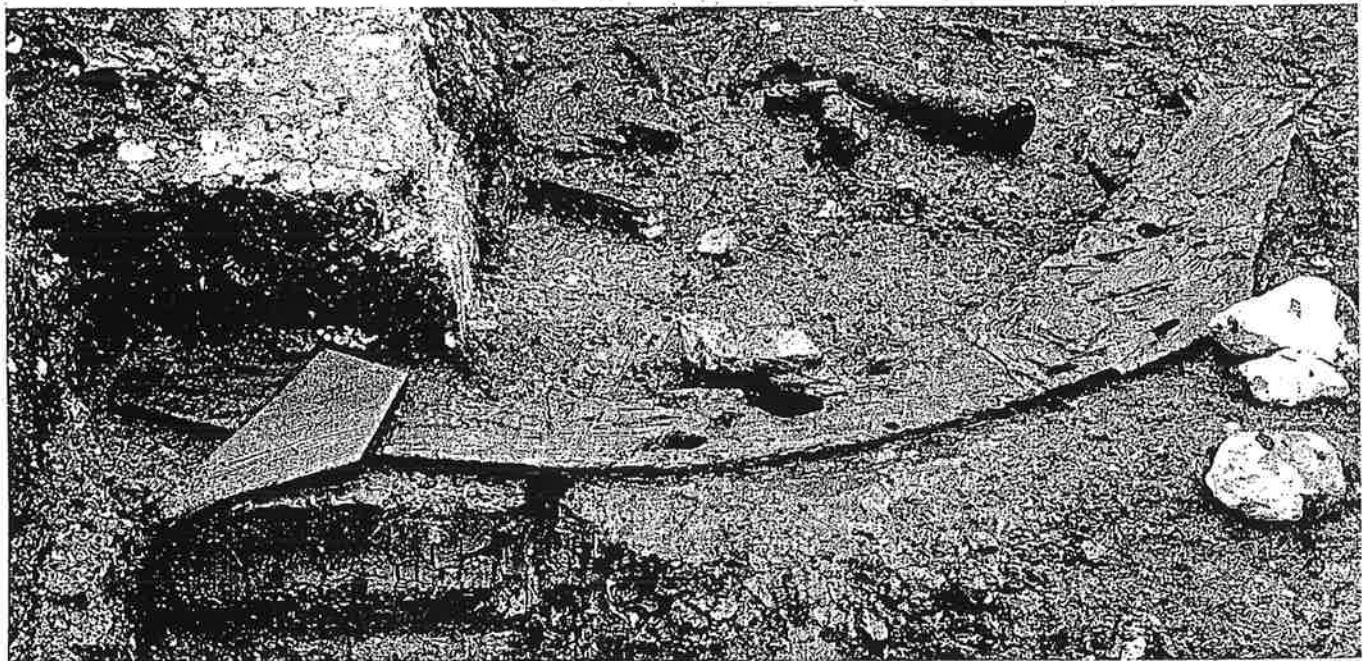
김해지역 고지형도

현재 김해지역 지형도

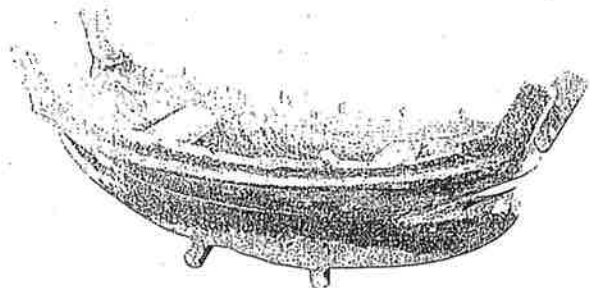
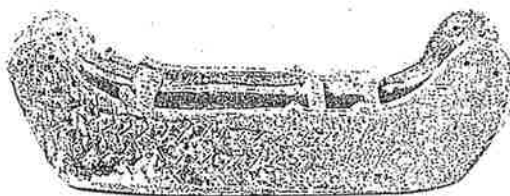


金海圓臺遺跡

김해지역지형의 변화
金海地域地形의 變化



古船舶의 肋骨 露出 狀態

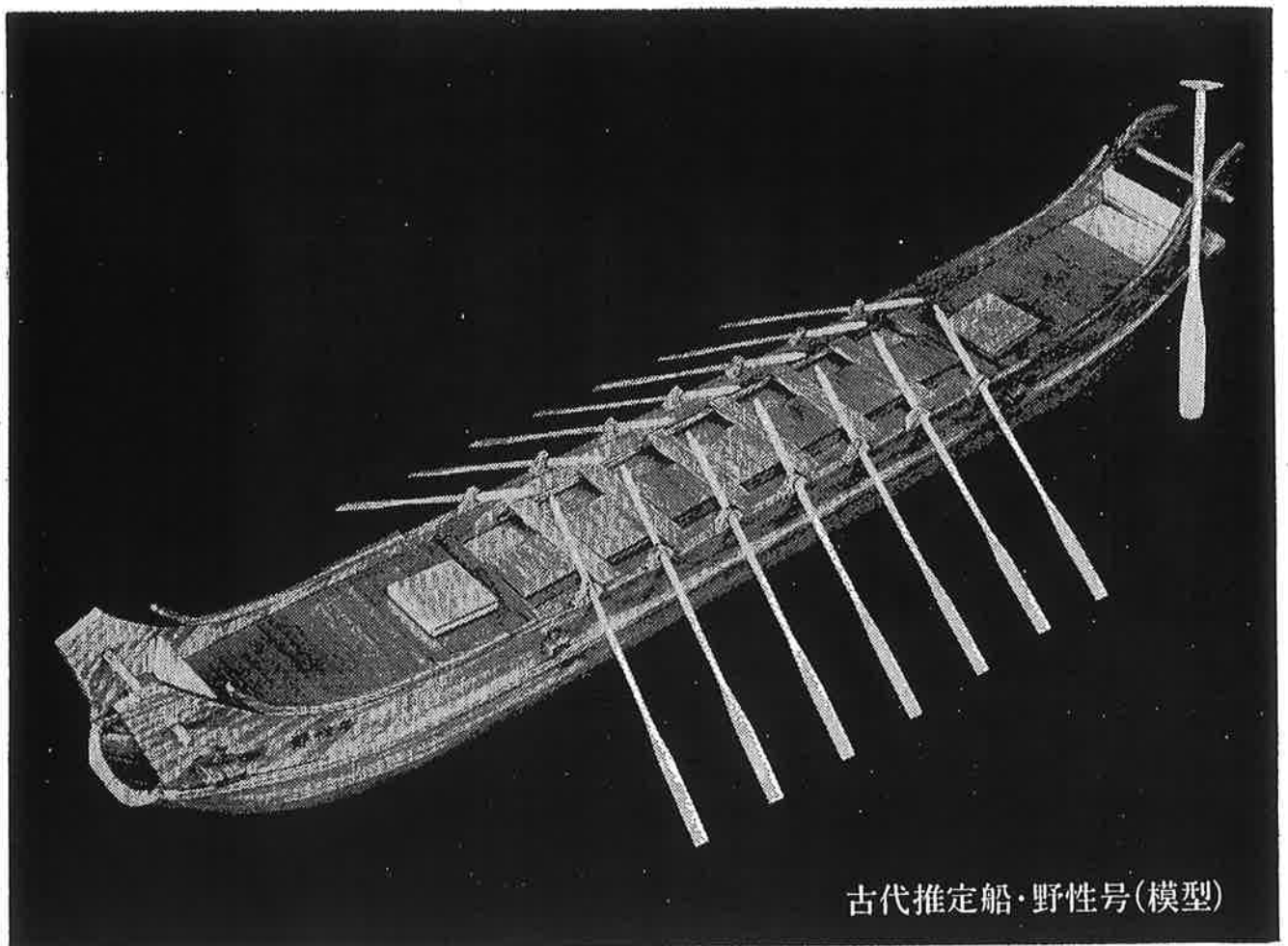


호암미술관 소장토기 湖巖美術館所藏土器

호림박물관 소장토기 湖林博物館所藏土器

김갑진, 2012 「해상왕국 가야시대의 선박—김해 봉황대 유적의 발굴조사 성과를 중심으로—」
ギム カッヂン 海上王國 加耶時代の船舶—金海 鳳凰臺遺跡の発掘調査成果を中心に—
『계간 한국의 고학』 Vol. 21

季刊 韓國의 考古學



古代推定船・野性号(模型)

使用船

古代推定船(設計—石井謙治)

〈長さ〉 一六メートル五〇センチ

〈幅〉 二メートル二〇センチ

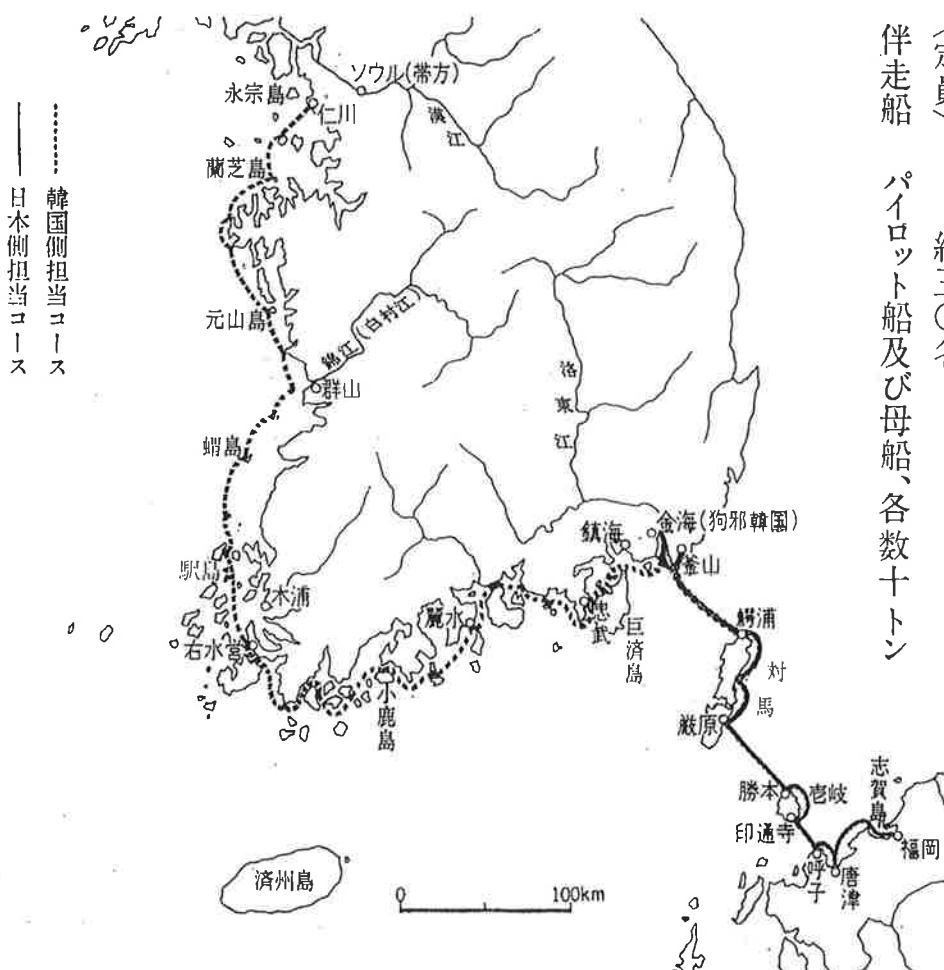
〈材質〉 カナダ松

〈排水量〉 約二三トン

〈総トン数〉 約三・九トン

〈定員〉 約三〇名

伴走船 パイロット船及び母船、各数十トン



又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官
 亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹
 木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足
 食亦南北市糴

(三國志「魏志倭人伝」より)



(狗邪韓国)

千余里



(対馬国)

比田勝

厳原

千余里



(一支国)

勝本

芦辺

郷ノ浦

石田

原の辻遺跡

千余里

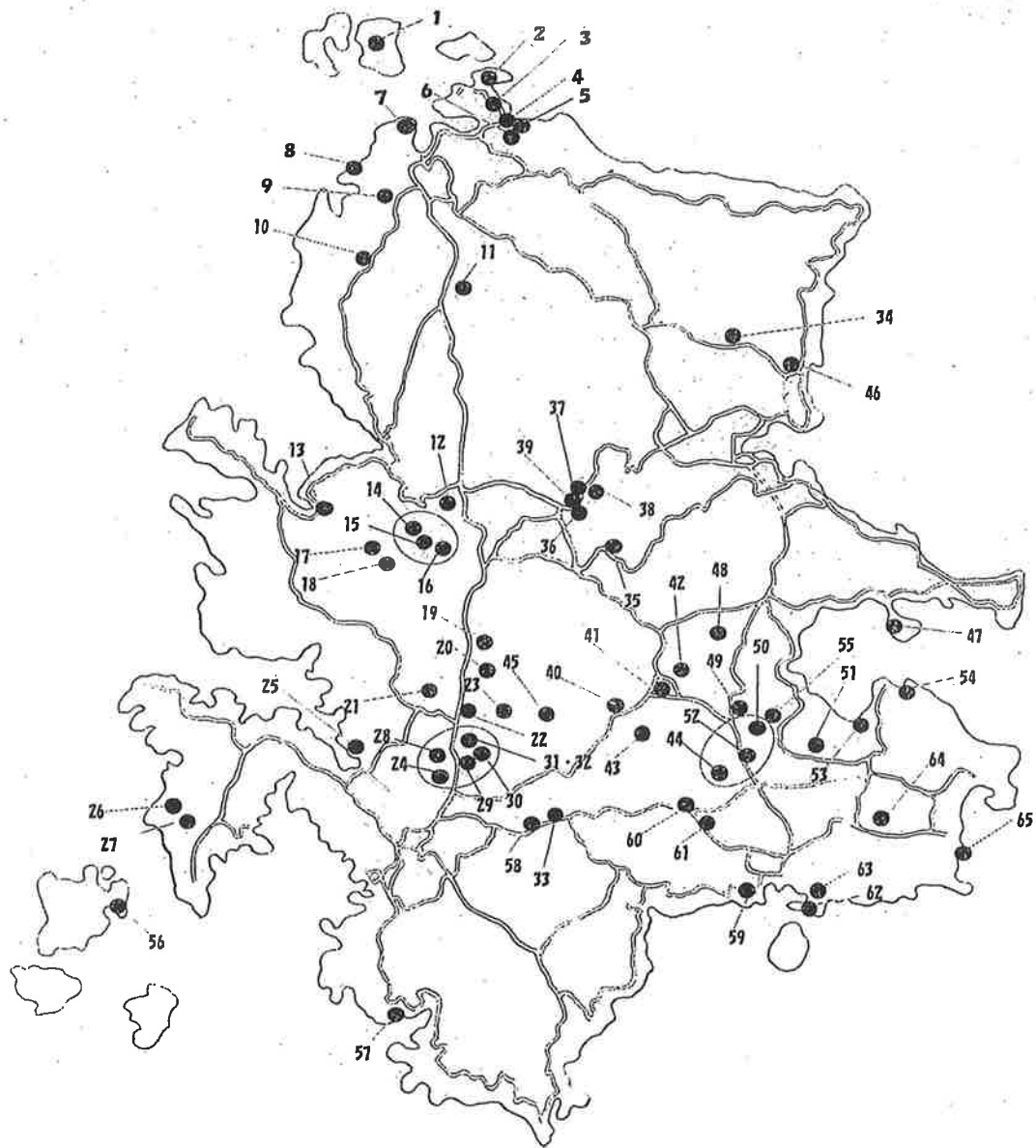


呼子

唐津

(末盧国)

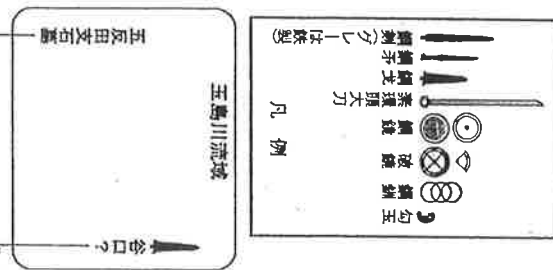
福岡

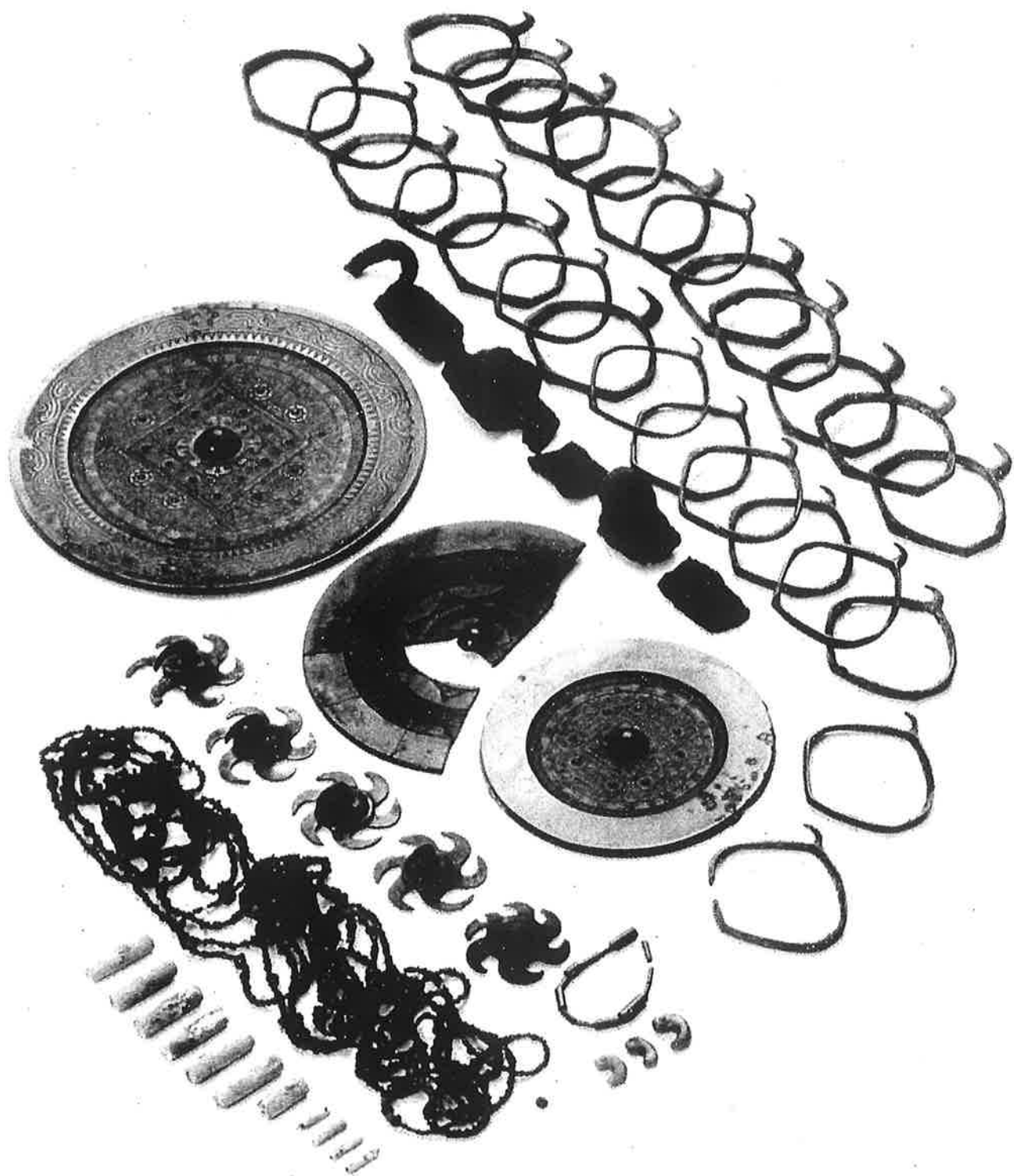


地図No	遺跡名	地図No	遺跡名	地図No	遺跡名	地図No	遺跡名
1	若宮島石棺墓群	21	山中遺跡	41	親城遺跡	61	白水遺跡
2	オオタキ遺跡	22	柳田遺跡	42	定光寺遺跡	62	浜田遺跡
3	串山ミルメ浦遺跡	23	桜江遺跡	43	興原遺跡	63	志自岐遺跡
4	天ヶ原遺跡	24	車出遺跡群(戸田地区)	44	原の辻遺跡(鶴田地区)	64	坂遺跡
5	天ヶ原セジョウ神遺跡	25	内野遺跡	45	朝日遺跡	65	大久保遺跡
6	天ヶ原石棺墓群	26	田頭遺跡	46	津持遺跡		
7	正村遺跡	27	南久保遺跡	47	青島遺跡		
8	大石遺跡	28	車出遺跡群(大谷地区)	48	深江本村遺跡		
9	水ノ元遺跡	29	車出遺跡群(田ノ上地区)	49	安国寺前遺跡		
10	東ノ木遺跡	30	車出遺跡群(車出地区)	50	原の辻遺跡(閼繰地区)		
11	丸尾遺跡	31	車出遺跡群(鉢形地区)	51	シメ辻遺跡		
12	高峰遺跡	32	天手長男神社遺跡	52	原の辻遺跡		
13	石路遺跡	33	宮原遺跡	53	天水遺跡		
14	カラカミ遺跡(川久保地区)	34	大左右遺跡	54	堂崎遺跡		
15	カラカミ遺跡(国柳地区)	35	通触遺跡	55	松尾遺跡		
16	カラカミ遺跡(カラカミ地区)	36	大谷第2遺跡	56	大泊遺跡		
17	木場遺跡	37	大谷第1遺跡	57	坪遺跡		
18	経ノ辻遺跡	38	月読神社前遺跡	58	橋町遺跡		
19	山飛遺跡	39	大谷第3遺跡	59	中尾遺跡		
20	高松遺跡	40	興触遺跡	60	津の宮遺跡		

壱岐島内弥生遺跡位置図

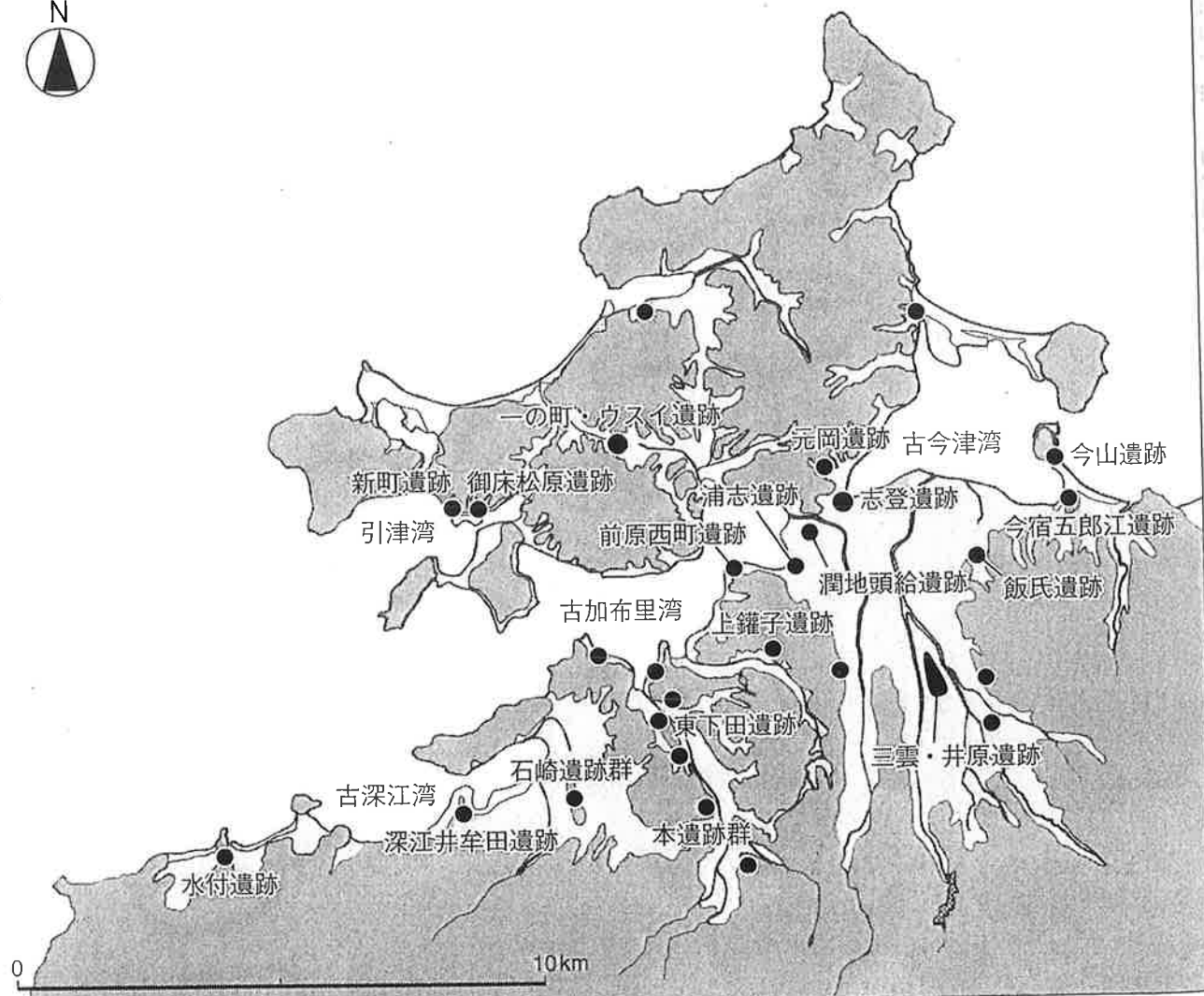
壱岐市教育委員会, 2012『国特別史跡 原の辻遺跡・カラカミ遺跡』
『壱岐市文化財調査報告書』第19集



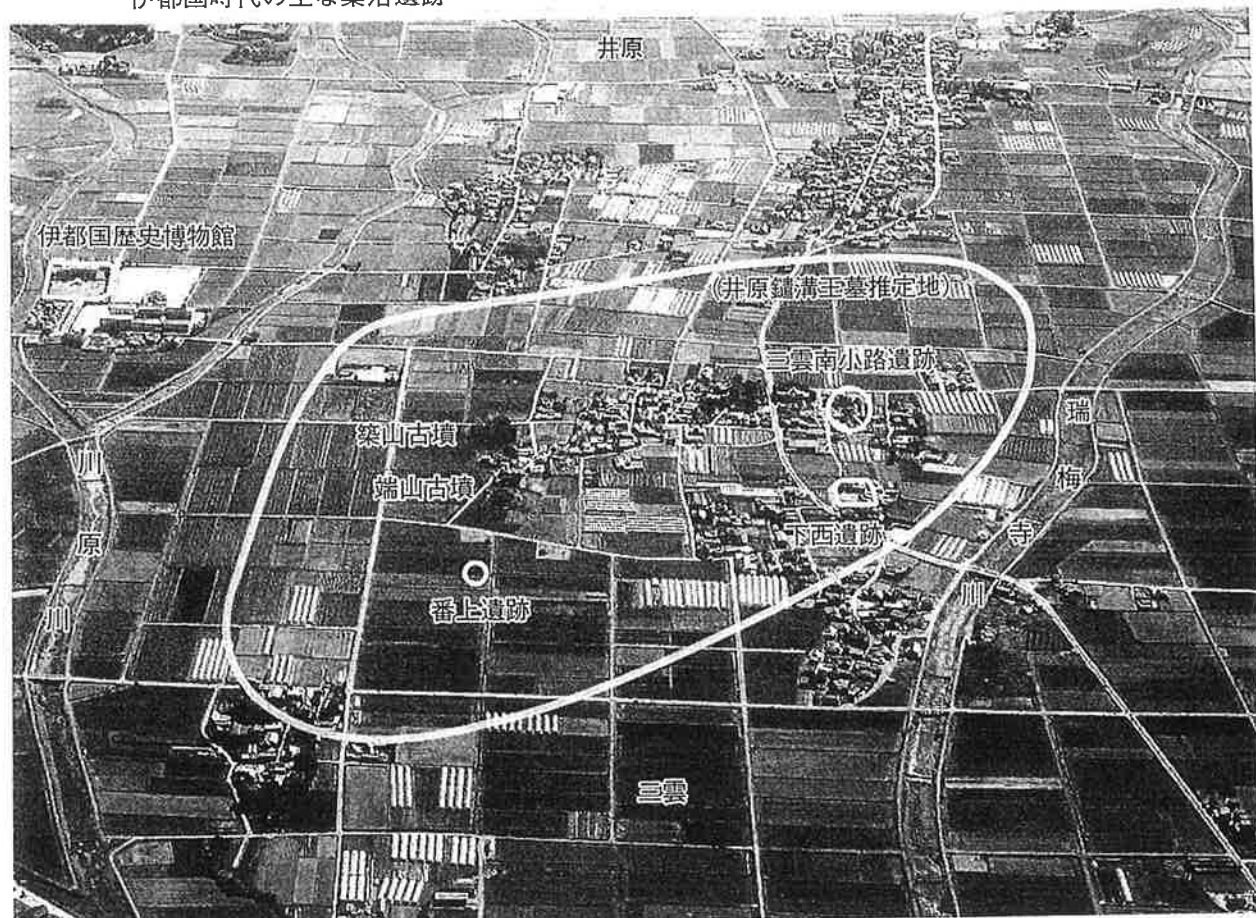


桜馬場遺跡出土重要遺物（佐賀県立博物館・唐津市教育委員会蔵）

唐津市教育委員会，2014『末盧国遺跡群—総括報告書—』『唐津市文化財調査報告書』第168集



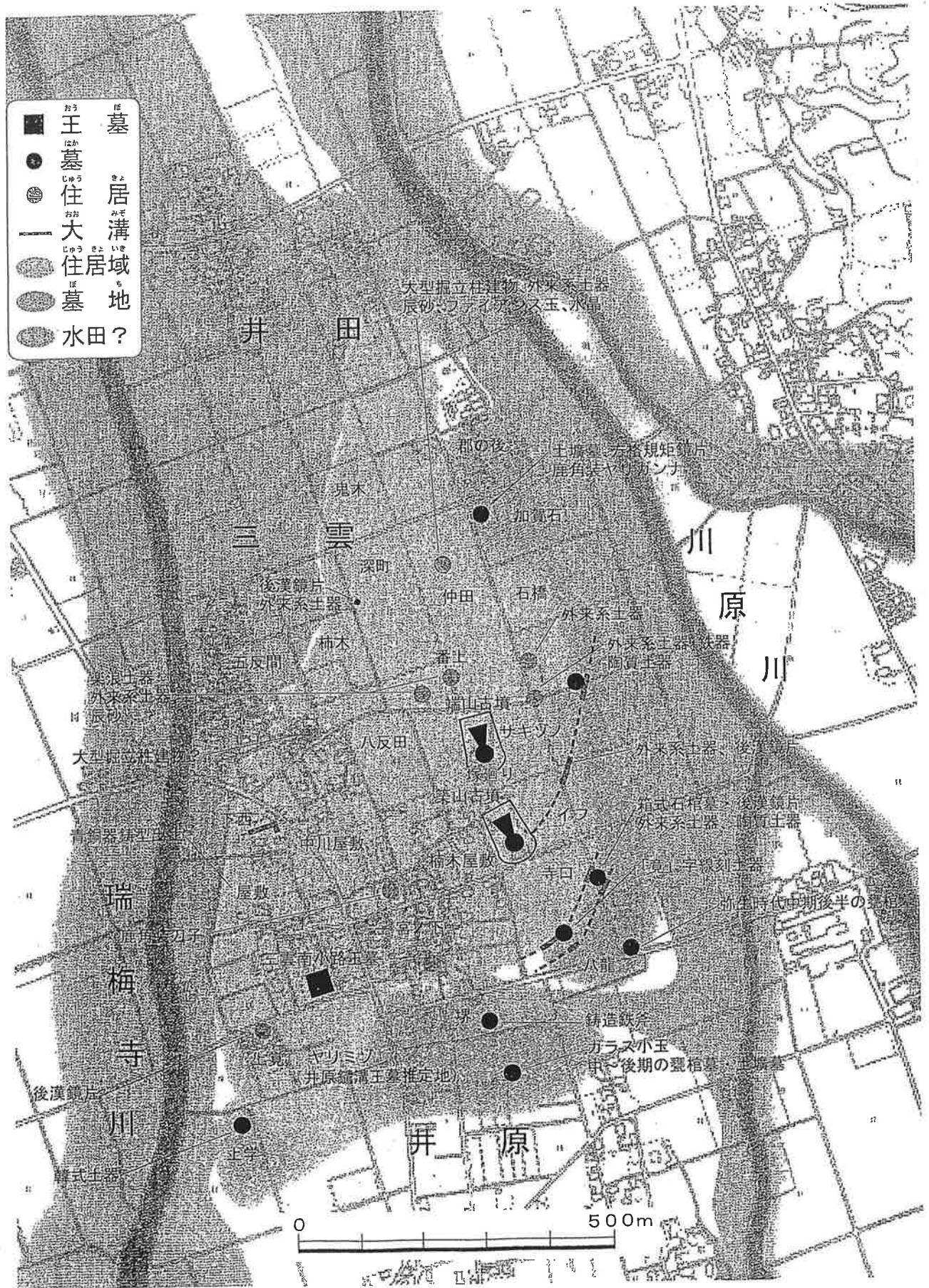
伊都国時代の主な集落遺跡



三雲・井原遺跡（北から）

岡部祐俊、二〇一三「伊都国の王と有力者たち―遺跡からみえてきた地域構造と社会構造」『海辺つなかる』と中国一邪馬台国の周辺世界

新泉社



伊都國歷史博物館，2004『伊都國歷史博物館常設展示圖録』



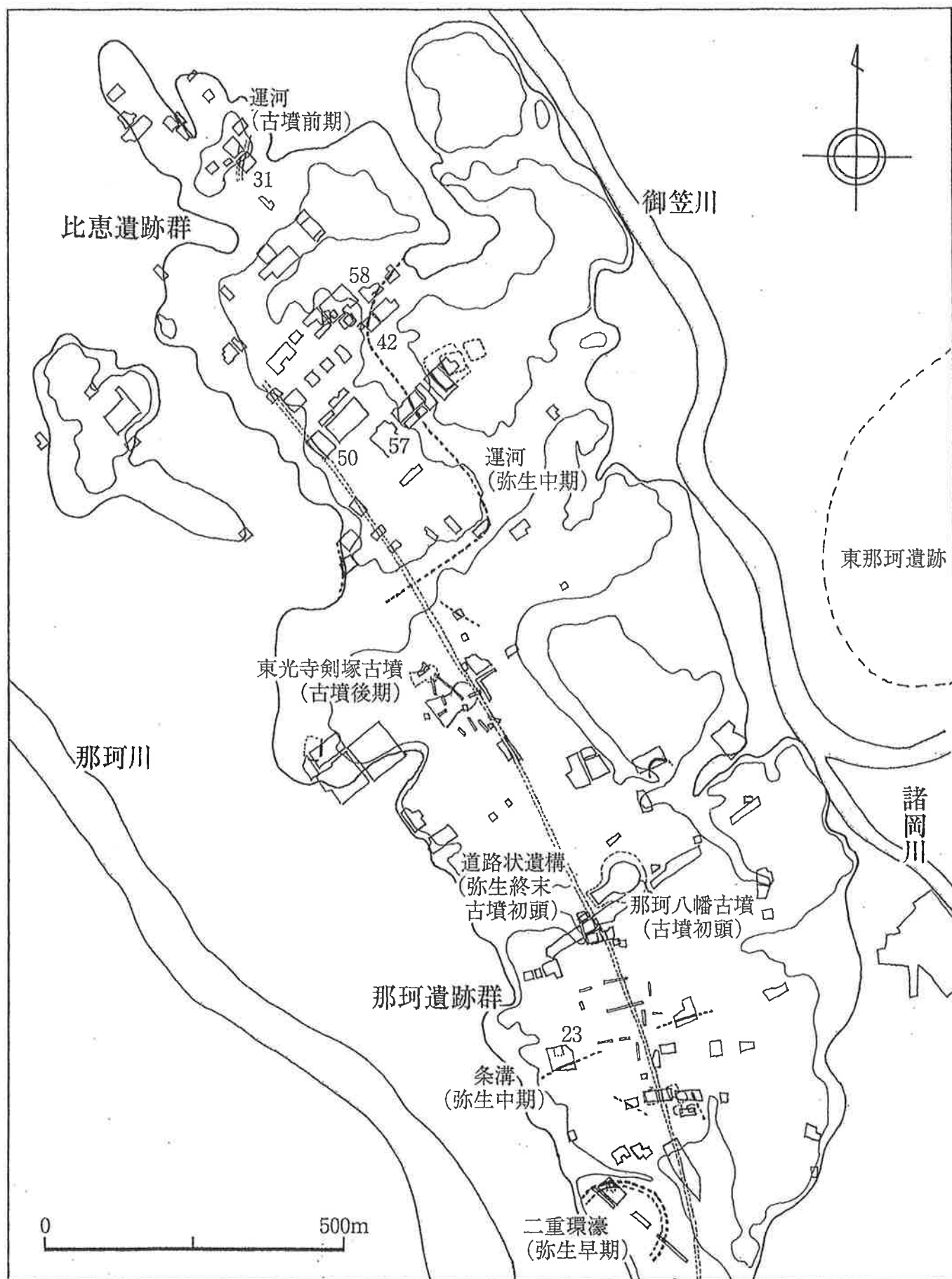
周辺遺跡分布図 (縮尺1/70,000)

- 前方後円墳
- 前方後方墳
- 方形周溝墓他
- ▲ 青銅器熔范出土地
- ▽ 青銅器出土地
- その他の遺跡

- | | | |
|------------|------------|-----------------|
| 1. 名島古墳 | 9. 板付遺跡 | 17. 竹ヶ本古墳 |
| 2. 博多一号墳 | 10. 諸岡遺跡 | 18. 大南遺跡 |
| 3. 博多遺跡 | 11. 井尻遺跡 | 19. 天神山古墳 |
| 4. 比恵遺跡 | 12. 金隈遺跡 | 20. ウトロ古墳 |
| 5. 那珂剣塚古墳 | 13. 今里大塚古墳 | 21. 観音山中厚 I-1号墳 |
| 6. 那珂八幡古墳 | 14. 御陵古墳 | 22. 炭焼古墳群 |
| 7. 那珂深ササ遺跡 | 15. 須玖岡本遺跡 | 23. 老松神社古墳群 |
| 8. 席田遺跡 | 16. 赤井手遺跡 | 24. 老司古墳 |

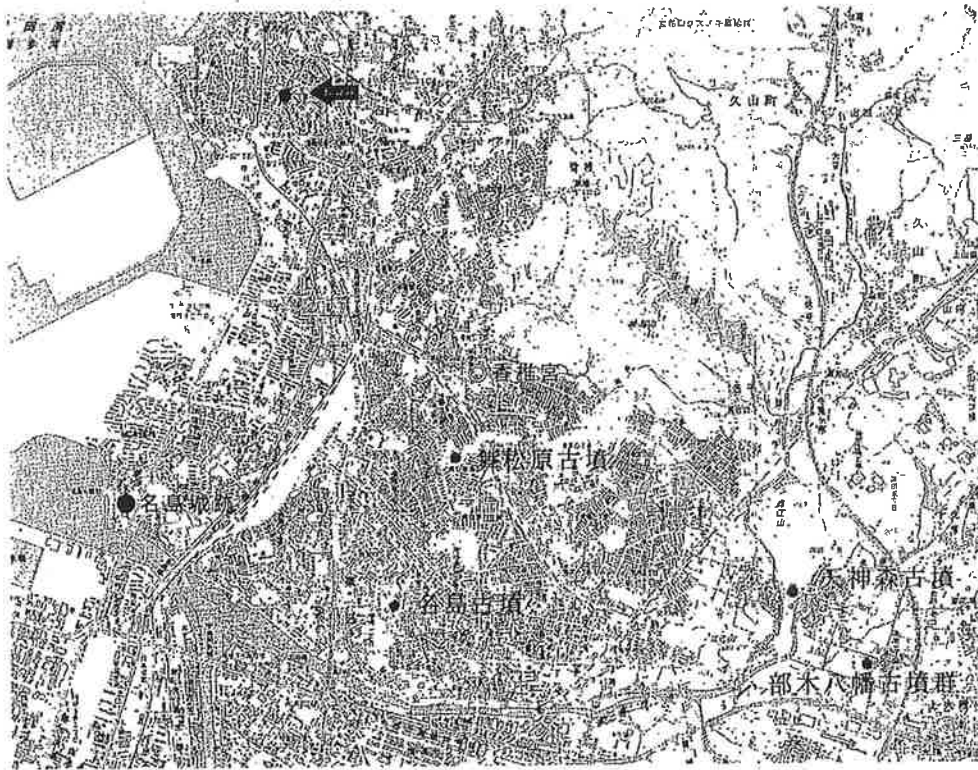
- 25. 卯内尺古墳
- 26. 裏ノ田 4号古墳
- 27. 小丸 1号墳
- 28. 妙法寺 2号墳

福岡市教育委員会, 1986
『那珂八幡古墳』『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第141集



比恵・那珂遺跡群全体図

吉嶋秀敏、2004「集落・居館・都市の遺跡と生活用具—九州」『考古資料大観』第10巻、小学館



◀ 広義の福岡平野を画する多々良川右岸から和白にかけての平野は狭小である。海岸部は現在よりも丘陵際まで迫っていたと推定されている。

この地域は、名島古墳を初めとする前期古墳が分布しており、九州北部沿岸では形成時期が早く特異な分布状況を示している。

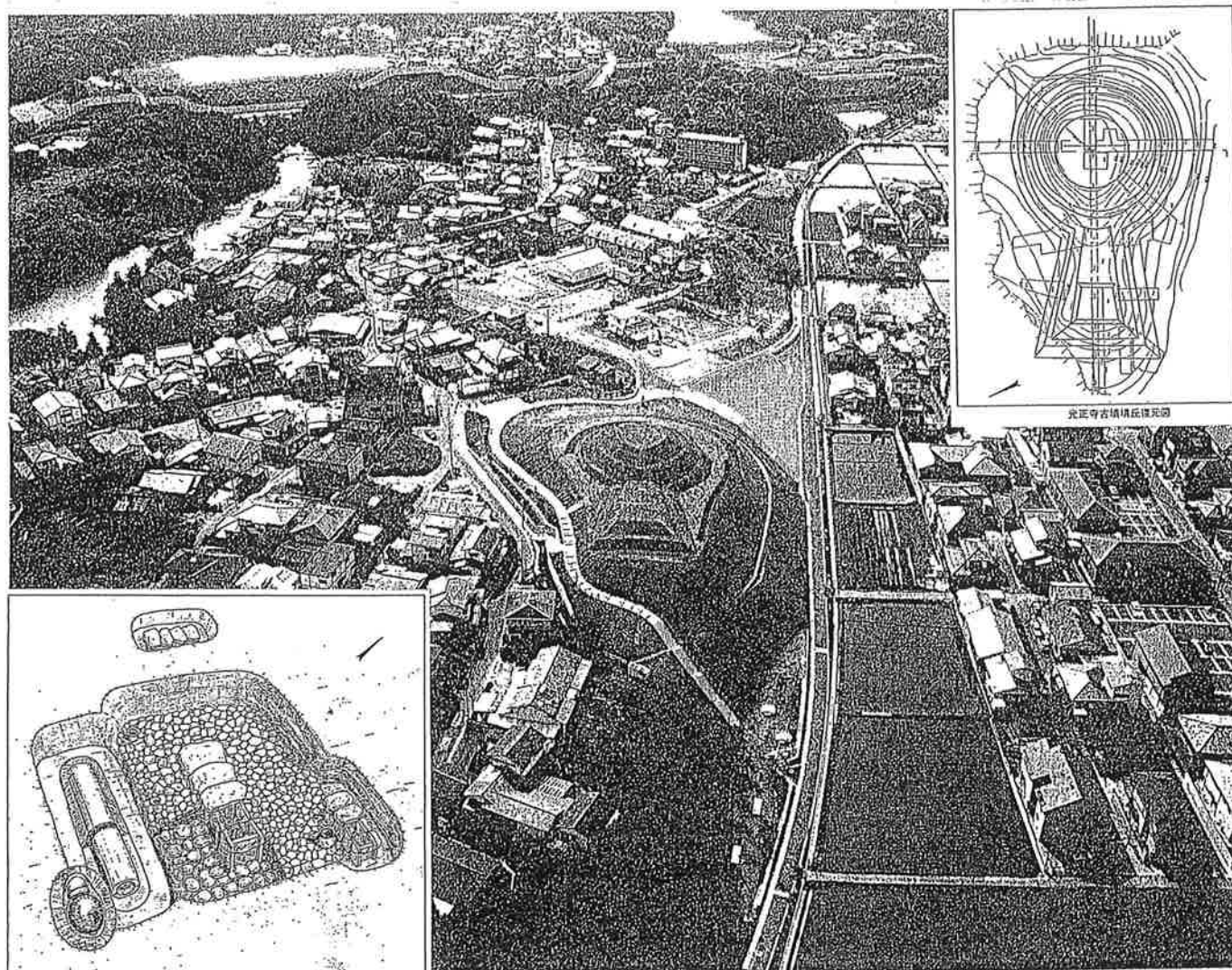
◀ 香住ヶ丘古墳位置図



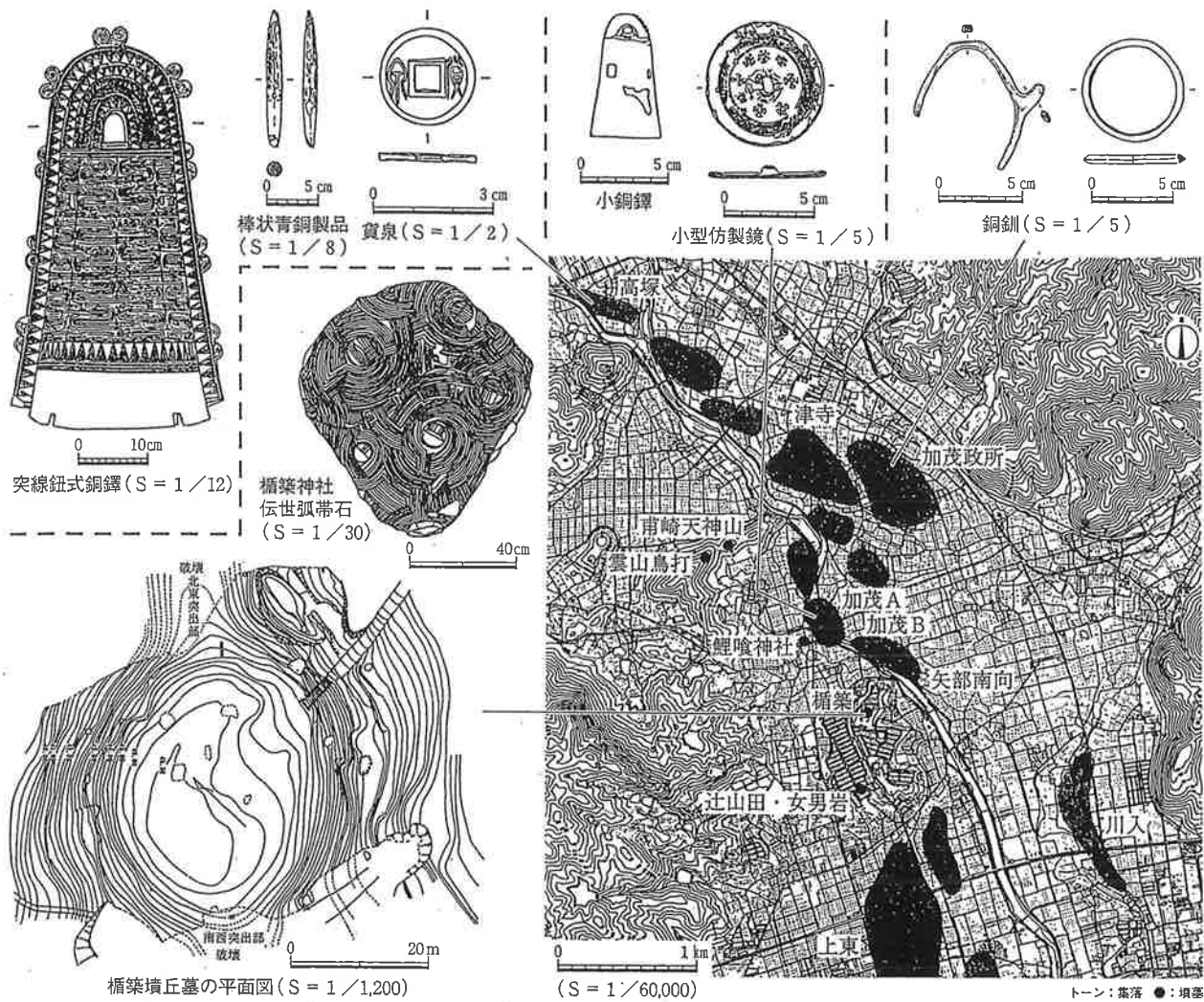
▲ 香住ヶ丘古墳出土の三角縁神獸鏡



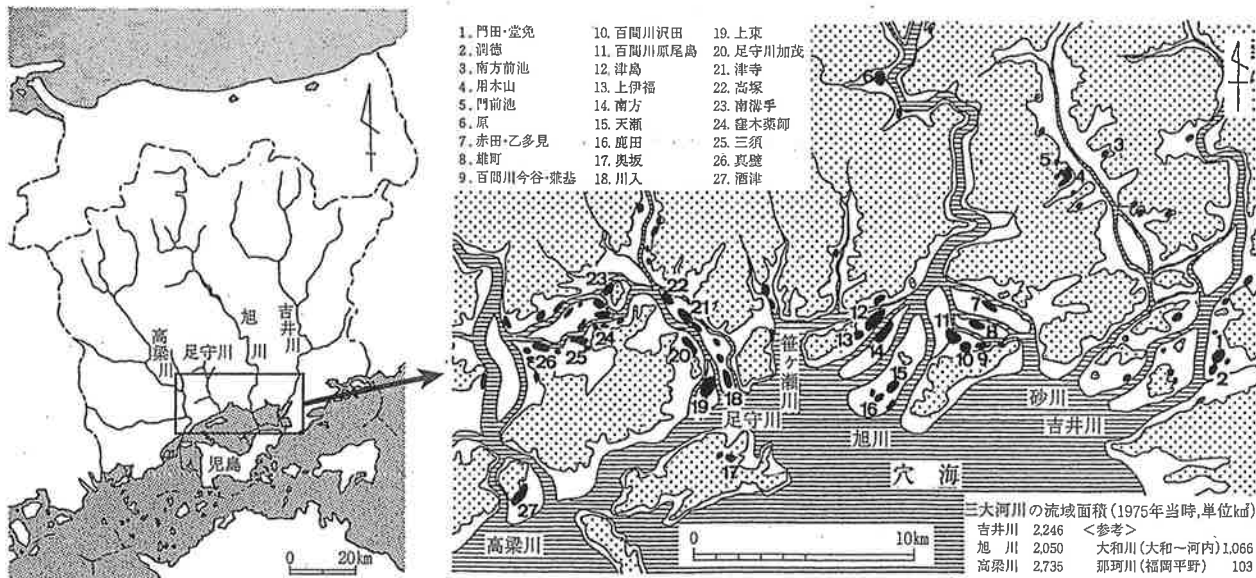
糟屋郡の位置と主要遺跡



光正寺古墳



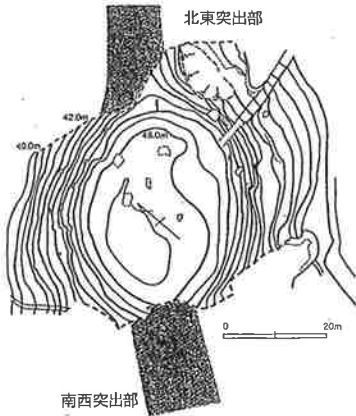
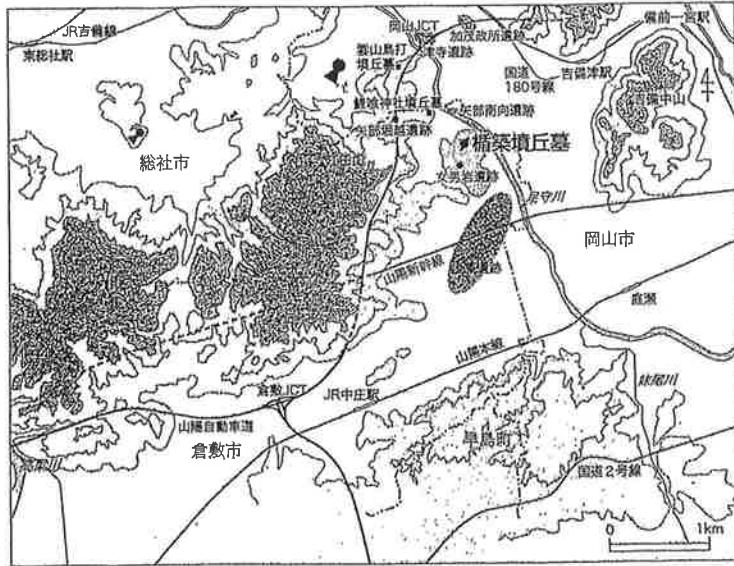
弥生時代後期後半の足守川下流域における遺跡分布および青銅器と楯築墳丘墓



岡山平野の地形とおもな弥生集落

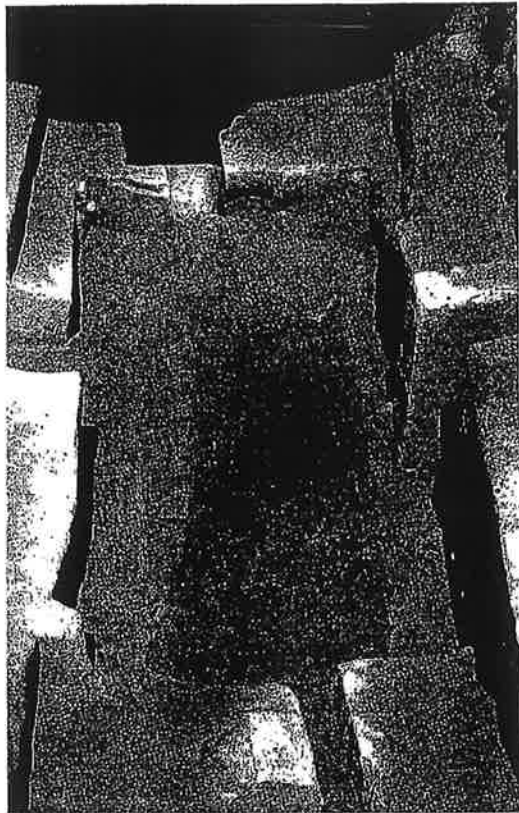
米田克彦, 2012 「投馬国—近畿説の場合—」『邪馬台国をめぐる国々』季刊考古学・別冊18

楯築墳丘墓の位置と周辺遺跡図

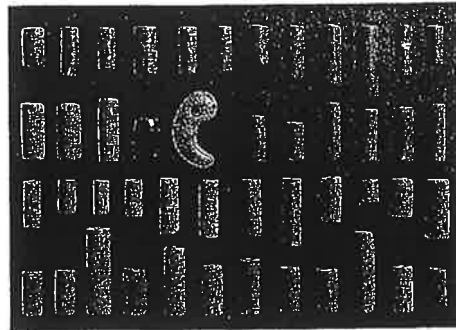


楯築墳丘墓測量図
(1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
P 11図7を一部改変)

出雲・西谷に眠る王のライバル 吉備の王墓・楯築墳丘墓



楯築墳丘墓の中心埋葬
手前側が頭であり、南東枕になる。
水銀朱の広がりが木棺の痕跡を示している。

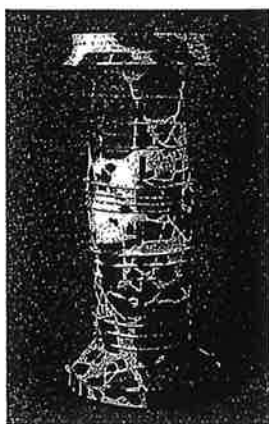


中心埋葬施設から出土した
碧玉製管玉、瑪瑙製聚玉、
硬玉製勾玉／弥生後期後葉

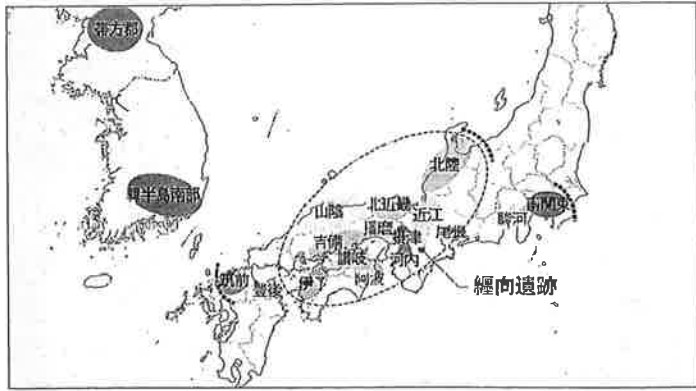
吉備の穴海を望む王墓
楯築墳丘墓は日本最大の弥生墳丘墓である。形は円形の主墳丘の北東と南西に突出部が付属しており、全長は78・5メートル以上と推定される。墳頂部には5個以上の巨大な立石があるほか、墳丘斜面にも二重に列石が施されていた。また、楯築神社の御神体として祭られている通称「亀石」と称される弧帯石は他に例のない異形の造形物として知られている。

墳頂部の中心埋葬施設では上縁で長さ9メートル、幅6・2メートル、深さ2・1メートルの墓穴が掘られ、内部には木槨と箱形木棺が納められていた。木棺内には総重量32キログラムの水銀朱をはじめ、各種の玉類、鉄剣が副葬されている。楯築墳丘墓は規模はもちろん、墓で行う儀礼のルールを完成し、西日本各地の墳墓祭祀に大きな影響を与えた画期的な弥生王墓である。

特殊壺と装飾器台／弥生後期後葉



特殊器台(立坂型)／弥生後期後葉
特殊器台、特殊壺は楯築墳丘墓のものが最古で、かつ完成度も高い。特殊土器を用いた墓前祭祀の手順や方法もこの墳丘墓で完成されたものである。



全国から土器が纏向に集まった

纏向遺跡には九州・山陰・山陽・四国・北陸・関東など、日本各地の土器が集まっている。物流センターの役割を果たしていたことが想定できる。図版制作/ジェオ



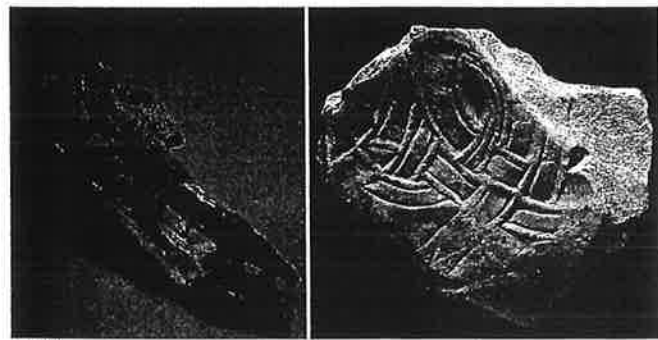
他の地域から持ち込まれた土器群

カワチ、オワリ、イセなど日本各地の土器が纏向遺跡で出土。これらの地域と強い交流のあったことがわかる。橿原考古学研究所付属図書館蔵



箸墓古墳

墳丘を当時の姿(左)と現在(右)で復元した模型。後門部に5段、前方部は前面のみで4段。墳丘全体は葦石で覆われていたとされる。国立歴史民俗博物館蔵



弧文円板(左)と弧文石(右)

弧文と呼ばれる文様の入った板と石が出土。祭祀具の文様として普及していたとされ、纏向で祭祀が行われていたことを物語る。桜井市教育委員会蔵

調査されたのは遺跡全体のわずか15%ほどで、学術調査はまだこれからといった状況だ。

実際、今年に入ってから多数の柱穴が見つかっており、今後の調査も大いに期待できる。纏向遺跡の調査開始は1971年。それから38年目となる2009年11月、166回目の調査にはじめて、東西に一直線に並ぶ建物群が現れた。

建物は3棟の掘立柱建物と柱列(柵)からなり、このうち中心的な位置を占める大型の掘立柱建物は約19・2m×12・4mの規模に復元できるもので、当時の建物としては国内最大であった。建物は柱列が規則正しく配列されており、東西

南北を意識して立てられたことが分かる。日本列島でこれほどの計画性を持ったものは纏向遺跡の建物群がはじめて。また、すべての建物と柱列(柵)の柱が抜きとられた痕跡があることから、他に移動したと考えられており、建てられた時期は3世紀前半か中葉とされている。

2011年に実施された調査では、建物群の近辺で大型の土坑がみつかり、多種多様な木製品やガラス製薬玉などが出土。さらに、遺構の埋土を詳細に調べた結果、魚や鳥、獣、栽培植物の種実が投棄されていたことが確認されている。土坑の掘削年代は、遺物の年代観から3世紀中ごろ。遺物の内容や土坑の北端が柵のラインと重なることから、建物群を取り壊した際もしくは土坑が掘削され、何らかの祭祀が行われた際の道具類が投棄されたのではと推定している。

卑弥呼が生きていた時代と建物群の年代は、時期が一致している。西南に一直線に並んだ建物の先には三輪山があり、そこから太陽が昇ればその景色は神々しく映るに違いない。祭祀が執り行われる際には、遙か遠方からさまざまな供物が届き、供されたのだろう。まさに卑弥呼の祭殿としてふさわしいと考えたくなるのだが、現段階では建物群と卑弥呼、邪馬台国を結びつける証拠は何もない。しかし、纏向遺跡には、卑弥呼のいた邪馬台国とする畿内説の証拠が出土する可能性を大いに秘めている。

邪馬台国と卑弥呼の遺跡は 纏向遺跡にある！

2009年に大型建物群跡が出土した奈良
県桜井市の纏向遺跡は、邪馬台国の最有力候補地。右側の前方後円墳は箸墓古墳。
写真提供／読売新聞/アフロ



卑弥呼が生きていた時代と
建物群があった時期が一致

邪馬台国の所在地の追究は、江戸時代以来より九州説と畿内説が対峙してきた。およそ280年にわたり繰り返されてきた論争はいまだ決着には至っていない。論争の決め手となるのは、卑弥呼の墓の所在地だ。そしていま、畿内説でもっとも注目されているのが纏向遺跡である。

奈良県桜井市北部、三輪山の麓に位置する纏向遺跡は、2世紀末あるいは3世紀初頭の集落遺跡だ。広さは70haとも100haとも言われており、同時代の遺跡のなかでは他に類を見ない広大な面積を有している。『魏志倭人伝』には「邪馬台国に至る、女王の都するところ」の人口を「七万余戸ばかり」と書いてあるが、七万余戸とは最大規模を意味するため、当時の邪馬台国は、日本列島で最大規模の国であったということになる。

また、纏向遺跡では、西は北部九州、東は南関東など、全国各地の土器が出土している。当時の鍋釜に相当する土器は生活必需品であることから、何らかの目的でこの地に集まった人々が、それぞれ自分の国から持ち込んだものと推測される。よその土地の土器は全体の出土品の20%を占め、諸地域の土器がこれほど集中して出ているのは纏向遺跡だけだ。巨大な古墳があり、幅5mもの水路の痕跡も認められるこの地は、墓づくり、ある

いは、大規模な土木工事のために全国から人が動員されたとも考えられる。

『魏志倭人伝』には「卑弥呼以て死す。大いに家を作ること径百余歩（卑弥呼が亡くなったときに大いに塚を作った）」とある。すでに物差しがあつた当時の中国の寸法から算出すれば、一步は150cmほど。「径百余歩」はおおよそ150mとなる。纏向遺跡の南側にある箸墓古墳は、全長280m、後円部直径は155m。後円部のサイズが『魏志倭人伝』の記録とほぼ同じである。

「遺体を埋葬するのは後円部なので、その直径を『径』として記したのではないかと」の意見があり、私もその考えを支持しています。卑弥呼が亡くなったとされているのは247年あるいは248年ですが、いまのところこの前後に築造された巨大な古墳は、全国を探してみても箸墓古墳以外にはありません。ですから私は、卑弥呼の墓は箸墓古墳であろうと考えています。『魏志倭人伝』の「大いに」を「大きな塚を」と「大いに塚を」のどちらで解釈するかという議論がありますが、私は「大きな」と解釈したいと思います（西谷氏）

しかし、『魏志倭人伝』には邪馬台国の宮室の様子を描いた「宮室は樓觀・城柵を蔽かに設け」との一文もあり、これを彷彿とさせる遺構が佐賀・吉野ヶ里遺跡にあるのに対し、纏向遺跡にその痕跡は見つかっていない。ただ、これまでに

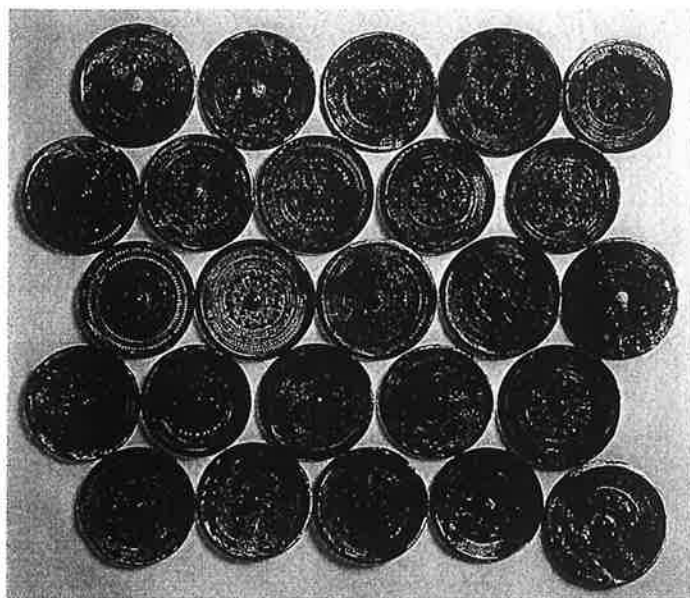
卑弥呼が授かった、銅鏡百枚は 魏の三角縁神獸鏡

三角縁神獸鏡は卑弥呼のために作られた特注品!?

魏の皇帝が卑弥呼の使いに持ち帰らせた「銅鏡百枚」は、一体どういう鏡だったのか。銅鏡は国内各所で大量に出土しているが、これまで3世紀の墳墓や前方後円墳から出土した後漢鏡、画文帯神獸鏡、三角縁神獸鏡などが「銅鏡百枚」、すなわち卑弥呼の鏡の候補に挙げられている。畿内説の場合、三角縁神獸鏡が「銅鏡百枚」だとすることが重要な論拠となっている。

大正時代、京都大学で講師を務めた富岡謙蔵が、大阪府国分奈山古墳から出土した三角縁神獸鏡の銘文に注目。「銅は徐州に出づ、師は洛陽に出づ（原料の銅は徐州でとれて、魏の都・洛陽でつくられた）」

と刻まれたこの鏡が「銅鏡百枚」であろうと説いた。この研究を深めたのが考古学者の小林行雄で、京都府木津川市山城町の椿井大塚山古墳で出土した32面の三角縁神獸鏡を詳細に観察し、この同範鏡（同じ鋳型で鋳造された鏡）が日本各地から出土していることを突き止めた。ひとつの原型からつくられた複数の鏡

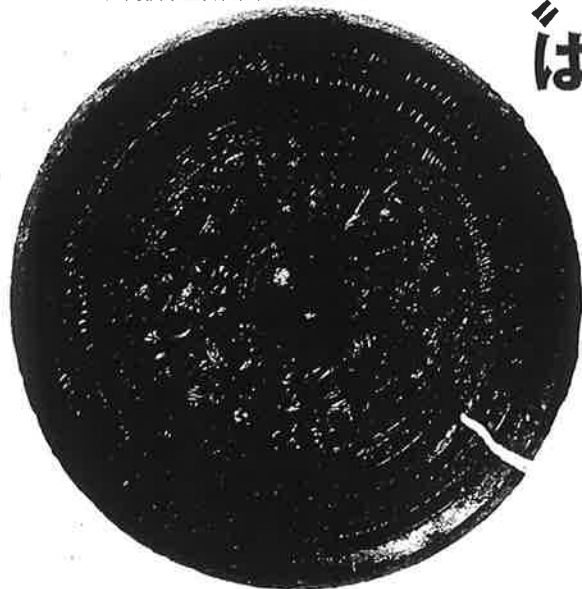


京都府椿井大塚山古墳から出土した三角縁神獸鏡

三角縁神獸鏡32面などが出土。考古学者・小林行雄は同じ鋳型で鋳造された鏡が全国各地の古墳から出土している事実をつきとめた。京都大学総合博物館蔵

景初3年の三角縁神獸鏡

1972年に島根県雲南市の神原神社古墳から出土した、魏の「景初三年」の年号が記された三角縁神獸鏡。文化庁蔵 写真／島根県立古代出雲歴史博物館



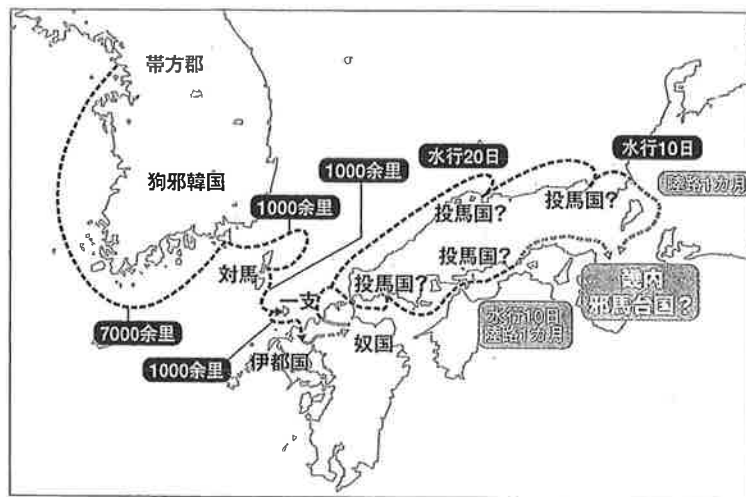
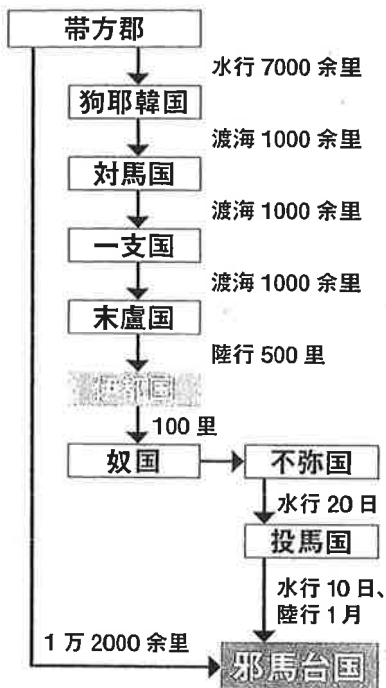
黒塚古墳から出土した神獸鏡

1997年に奈良県天理市の黒塚古墳石室から33面の三角縁神獸鏡と画文帯神獸鏡1面が出土。三角縁神獸鏡は棺外に並べられていた。橿原考古学研究所附属博物館蔵

が日本各地で離ればなれに出土したこと
から、小林は椿井大塚山古墳に埋葬され
た人物が鏡を大量に持つていて、ヤマト
政権のもとで各地の豪族に分け与えたと
考察。つまり、魏からもらった「銅鏡百
枚」を地方に分け与えた近畿地方が、邪
馬台国のあった場所という結論に至る。
1972年には、島根県雲南市の神原
神社古墳から「景初三年」と刻まれた三
角縁神獸鏡が出土した。卑弥呼の使者が
皇帝より銅鏡百枚を下賜された年がまさ
に景初3年。その年号を刻んだこの銅鏡
こそ、卑弥呼の鏡の第一候補と目された。
一方、「銅鏡百枚」を贈った魏で三角
縁神獸鏡と同様の鏡が1枚も見つかって
いないことや、実際には存在しなかった
はずの「景初四年」という銘が刻まれた
鏡が見つかったことで、三角縁神獸鏡は
日本でつくられたもので「銅鏡百枚」に
はあたらなとの指摘がある。

「鏡をつくるときに、あらかじめ翌年の
年号を刻むことはあり得ることです。実
際に瓦や土器などに存在しない年号が刻
まれているものがあります。また、魏で
同様の鏡が見つからないのは、卑弥呼
のためだけの特注品とも考えられます
し、ただ見つからないだけで探せば
出てくる可能性もあります。倭国が外交
関係を持った年号を記した鏡は物的証拠
となり得るわけで、三角縁神獸鏡が卑弥
呼の鏡であろうとの考えがゆらぐことは
ありません（西谷氏）」

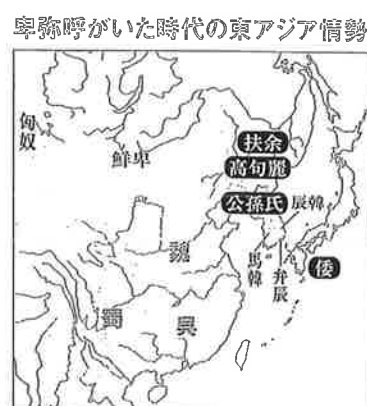
伊都国以降に出てくる国名を順番に読んでいく読み方を「連続説」と呼ぶ。伊都国があり、その先に奴国があり、その先に投馬国があり、その先に邪馬台国があると読む。



『魏志倭人伝』によると、投馬国から邪馬台国まで「水行十日陸行一日」とあるが、瀬戸内海を通ったとする説と、日本海側を通ったとする説がある。図版制作／ジェオ



14世紀の世界地図に描かれた日本
昔の地理認識では日本列島の九州が北、北海道が南となっている。これによると、「南」の記述は、実際には「東」だった可能性がある。



※図は「混一疆理歴代国都之図」を元に作成

『魏志倭人伝』が書かれたのは3世紀前半。当時の中国大陸は、後漢が滅んで北に魏があり、西南に呉、東南に蜀という3つの国に分裂していた時代で、魏は朝鮮半島西北部に楽浪・帯方郡を設置していた。『三国志』を編さんした陳寿があげた方針は2つあった。

ひとつは、魏王朝が中国の正当な国家で、いかに統一国家としてなるべくしてなる国であったかを叙述すること。もうひとつは、周辺の異民族の変事に備え、動向を把握することだった。

当時、魏は呉や蜀と対抗しており、結果的には魏（のちの西晋）が統一することとなるが、魏は西南の蜀よりも東南の呉を注視した。もし、呉が倭国・日本と手を結べば魏にとっては脅威となる。魏は自国に近い呉を牽制する意味で、朝鮮半島南部から日本列島の状況を十分把握し、味方につけることが大事であったのだ。そのような遠くと交わり近くを攻めるという魏の「遠交近攻」の政策もあり、魏国と倭国の外交関係は成立したと考えられる。

「そのなかで記録された『魏志倭人伝』は、方向や距離、日にちといった地理的な情報やどんな格好をして何を食べていたというような生活情報は大した問題で

はなかったと考えられます。邪馬台国の場所を示す手がかりとなる投馬国は『(不弥国から) 水行二十日』、邪馬台国は投馬国から『水行十日陸行一月』という記述にしても、これをもとに場所を特定するのは無理があります。畿内説の立場から言えば、島々や陸地を見ながら瀬戸内海を渡り、陸にあがって現地に向かったと仮説を立てることはできませんが、確証はありません。『魏志倭人伝』でもっとも重要とされたのは、魏国と倭国が外交関係にあったことを記録することだったのです(西谷氏)。

では、『魏志倭人伝』で信用できるのはどの部分か。それが、後半に出てくる「親魏倭王卑弥呼に制詔す」からはじまる詔書だ。景初3年に卑弥呼が出した使いが魏の都・洛陽に行つた際、ときの皇帝・明帝が発した詔を文書にしたためた詔書は、そのまま『魏志倭人伝』に引用した可能性があり、信憑性が高い。

皇帝は卑弥呼の使いに対して、真珠や鉛丹、五尺の刀、銅鏡百枚などの土産物を持たせて帰らせる。おそらく、ここに記された品目は正確で事実だろう。そして、遺跡や古墳からは、刀や鏡が数多く出土している。『魏志倭人伝』の信用できる記録にある刀や鏡は考古学の対象物であり、邪馬台国の所在地を議論するうえではもっともふさわしい史料である。

とりわけ銅鏡百枚がどういったものなのかが、重要な研究のテーマとなっている。

『魏志倭人伝』から、銅鏡や古墳の出土、纏向遺跡まで多角的に徹底検証！

邪馬台国「畿内説」を裏付ける最新研究公開！

畿内にはかつてこの地に強大な権力が存在していたことを物語る大型古墳群が集中する。
なかでも、奈良県桜井市三輪山の北西に広がる纏向遺跡は邪馬台国の最有力候補地であり、畿内説では善墓古墳こそが卑弥呼の墓だと主張している。最新研究から、その論拠を明らかにする！

『魏志倭人伝』から読みとく
邪馬台国と魏の外交関係

奈良盆地東南部、桜井市の北部にある三輪山。山自体が神体とされる。© MACHIRO TANAKA/SEBUN PHOTO/amanaimages

監修／西谷正

1938年大阪府生まれ。考古学者。糸島市立伊都国歴史博物館名誉館長、宗像市郷土文化学習交流館海の道むなかた館館長、九州大学名誉教授。専門は朝鮮半島を中心とした東アジア考古学。著書に『魏志倭人伝の考古学』（学生社）、「古代北東アジアの中の日本」（祥書院）などがある。

文／蔵迫ゆり子

倭人伝に書かれた方向や距離、地理的情報は重要ではない

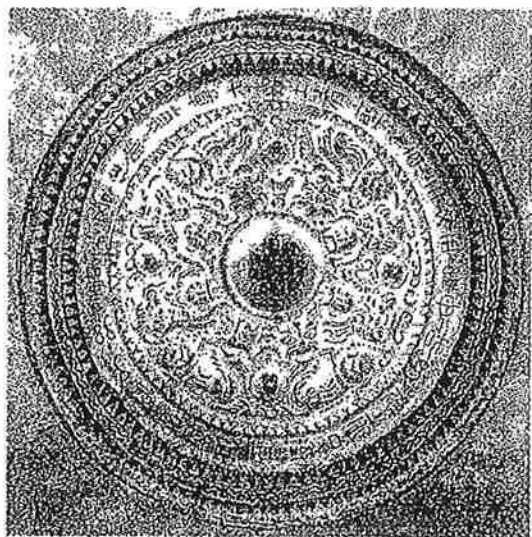
中国の歴史書『三国志』の『魏書卷三〇』東夷伝に登場する邪馬台国。日本古代史に関する最古の史料であるこの『魏志倭人伝』は、邪馬台国と卑弥呼の存在を裏付ける基本的なテキストである。しかし、ここに記録された邪馬台国に至る距離・方位などの地理情報や、倭人の風俗・習慣などの生活情報は、かなり正確な部分が多いことがわかつている。例えば、末盧国から伊都国までが「五百里」、伊都国から奴国まで「百里」とあるが、実際に地図で見ると同じ距離なのだ。また、倭には「牛馬なし」と記されているが、実際には牛や馬の飼育出土している。もちろん、正確な部分も多く、情報がどれも信用できない部分も極くではない。考古学者の西谷正氏は、魏志倭人伝がなぜ書かれたかという点をまず考えておくべきだと言う。

「魏の歴史書に海の向こうの小さな国のことが記録されたことには、それ相応の理由があったはずだ。そもそも『三国志』



洛阳三角缘笠松纹神兽镜

王趁意, 2014「洛阳三角缘笠松纹神兽镜初探」『中原文物』2014年第6期



图一 洛阳三角缘笠松纹神兽镜



图二 日本三角缘“吾作”铭四神四兽镜



图三 洛阳三角缘笠松镜上的单层笠松纹



图四 洛阳三角缘笠松镜上的双层笠松纹



图五 日本三角缘“陈是作镜”
铭四神兽镜上的单层、双层笠松纹



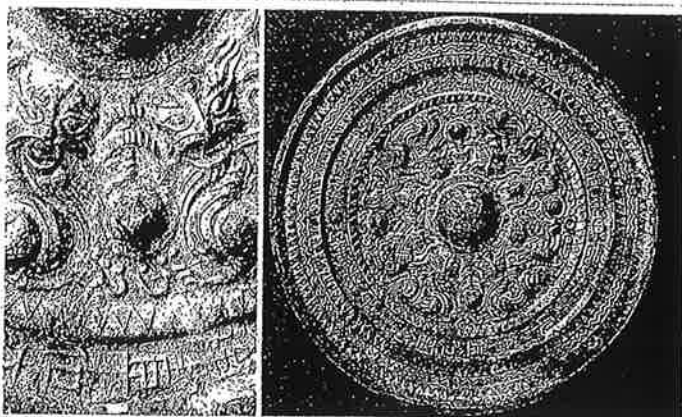
图六 洛阳三角缘笠松镜铭文
带中心定位线



图七 洛阳三角缘笠松镜
三角缘细部图

王趁意, 2014「洛阳三角缘笠松纹神兽镜初探」『中原文物』2014年第6期

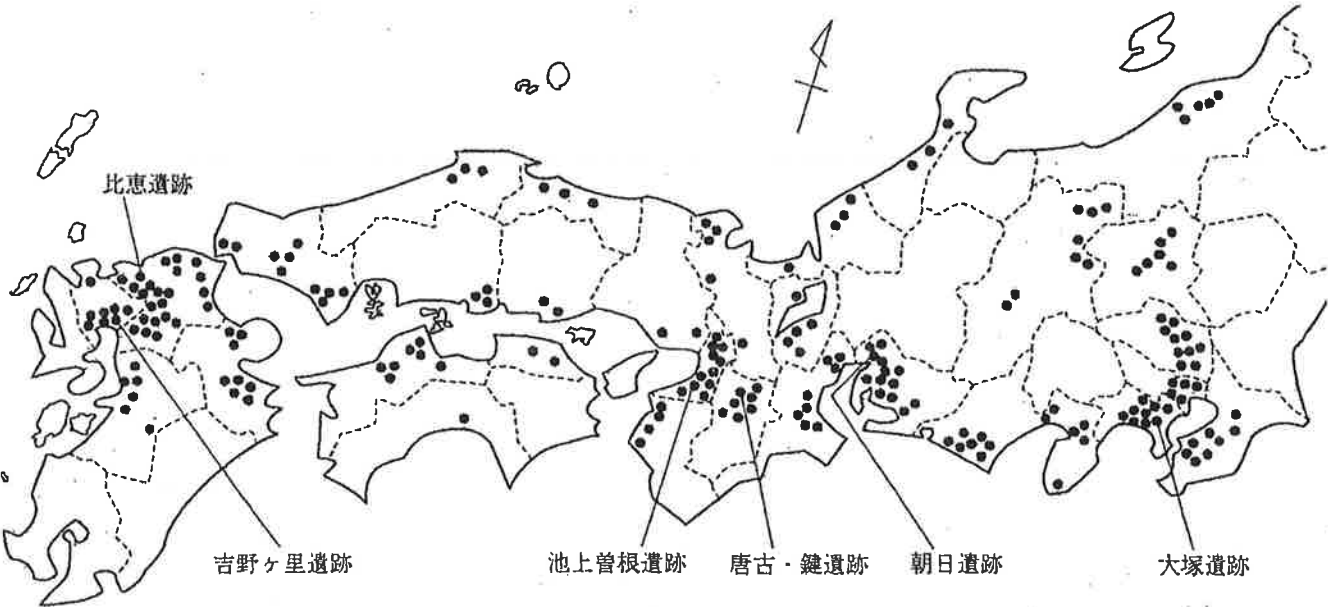
⑤中国で見つかった三角縁神獣
鏡⑥三角縁神獣鏡の二重笠松文
様||いずれも王趁意さん提供



2015年3月2日付『朝日新聞』朝刊



大崎台遺跡全景／千葉県



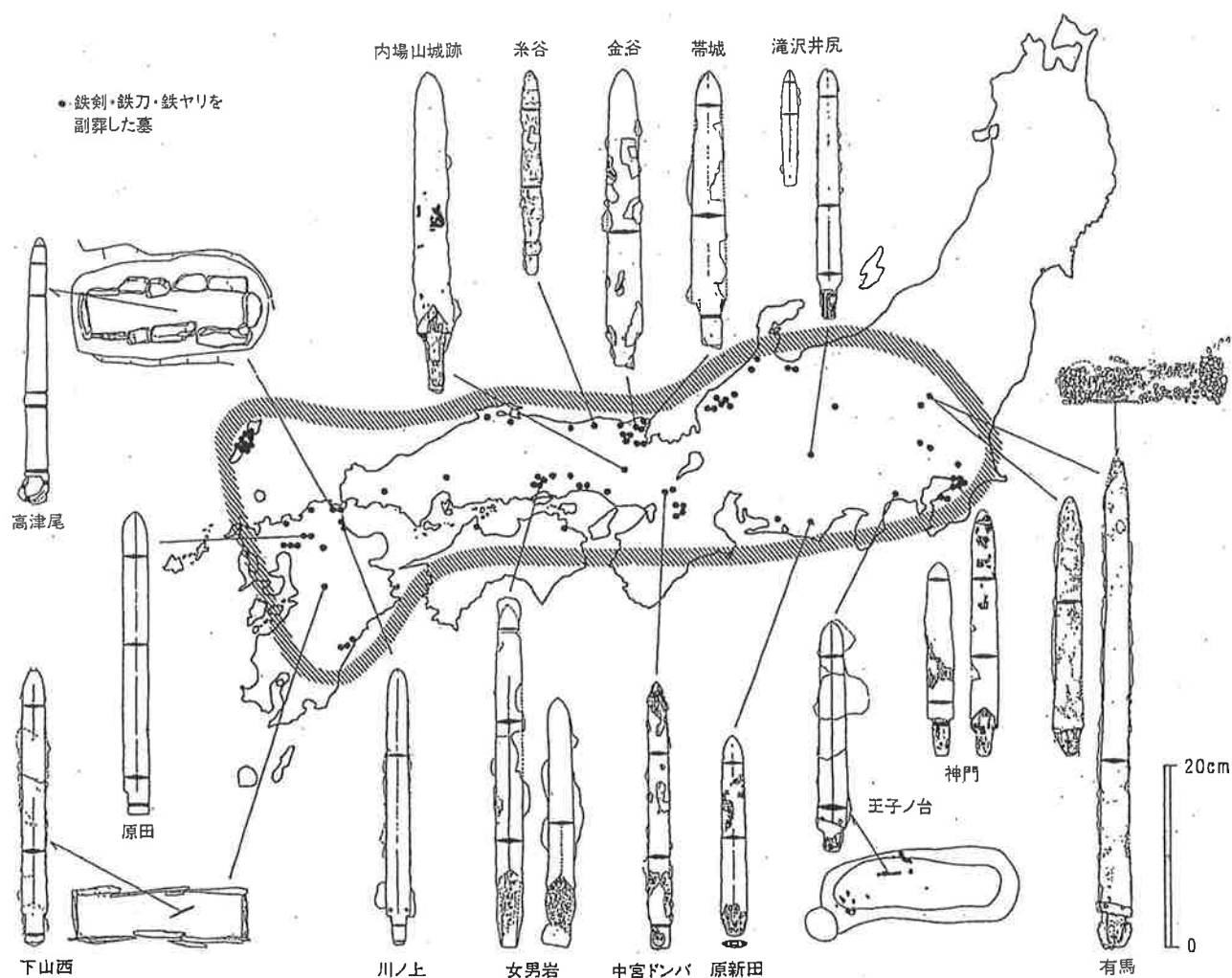
日本列島における弥生時代環濠集落の分布の概観（約500カ所ある）

- ・第Ⅴ様式（弥生時代後期）、防禦的集落址分布
- ① 畿内勢力の東海地方への進入
- ② 吉備（畿内）等勢力の北九州地方への進入
- ③ 吉備勢力の大和への進入



前澤輝政, 1996「＜倭国大乱＞考」
『古代学』第135号

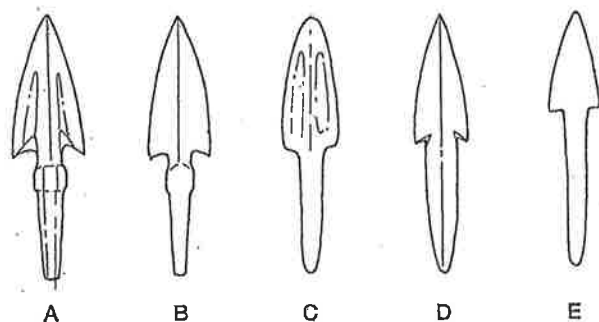
「大乱」の推定地域



弥生時代終りころの武器と戦いのひろがり
(鉄剣)

国立歴史民俗博物館, 1996~97 『倭国乱る』 朝日新聞社

銅鏃の形態分類



銅鏃形態分類

A類・・・原の辻を代表する中期後葉の銅鏃

B類・・・A類からやや退化傾向をみせ、鏃被の造りが雑でやや扁平となる。

C類・・・逆刺の造りが弱く、鏃被が消滅する。樋が特徴である。

D類・・・断面三角形を呈し、逆刺は短いが鋭い。逆刺は、茎の側面から削り出す。

E類・・・茎が刃部よりも長くなる。造りも概ね雑となる。

私の福岡勤務は、高度経済成長政策に伴う各種の大規模開発に対応するべく、埋蔵文化財部局の充実を目ざす措置であった。私は主として、九州縦貫自動車道建設に係わる緊急調査を担当したが、とくに強い関心をもったのは、山門郡における発掘調査であった。その当時は、山門郡といえ、いうまでもなく邪馬台国九州説の最有力候補地であったからである。山門郡での調査は、瀬高町の山麓地帯に幅約二十キロのトレンチを南北に数カ所入れるといった形のものであった。私は、緊急調査と併行し、あるいは、報告書作成の過程で、山門郡全域の旧地形復元や旧石器時代から古墳時代までの歴史的発展の概観なども行った。

そのときの調査成果は、昭和四十八年（一九七三）五月に九州大学へ移ってから、「九州文化史研究所紀要」第二一号（一九七六）において報告している。そこでは、山門郡域に倭人伝に記載される三十国のような一つの国を想定することは可能であるが、そこに邪馬台国の所在地は考えないことを明記した。

ところで、私の山門郡における発掘調査も契機の一つであったが、さらに昭和四十二年（一九六七）刊の宮崎康平「まぼろしの邪馬台国」以来続く、いわゆる邪馬台国ブームも背景となつて、邪馬台国問題に無関心ではいられなくなったことも確かである。そのため倭人伝を、東夷伝いな「三国志」の中で位置づけながら本気になつて読むようになっていった。

倭人伝のおもしろさは、何といつてもそこには文献史料と考古資料の接点が見いだせることである。吉野ヶ里や原の辻の遺跡に対する発掘調査が進むにつれて、倭人伝の記述が検証されている。考古学の発掘成果は、倭人伝を裏付けたり、限られた部分を補ったり、さらには、一部を修正させたりと、興味はつきない。このような文献史料と考古資料の共同作業を経て、国家形成への胎動を示す日本列島の様子が浮き彫りになってくるのである。そして、倭人伝を通じて、私たちの視野は朝鮮半島や中国大陸へと広がっていく。こうして、私の倭人伝との付き合いは、続き続けることになるわけである。

『発刊に寄せて』

『倭人伝と私』

●九州大学教授●——西谷 正

いまから四十四年前の春のことである。私は高等学校に入学すると同時に、何のためらいもなく地歴部に入った。クラブの日常的な活動は、歴史書の輪読や遺跡・史跡の見学などが中心であった。その際、顧問の太田計夫先生が折に触れ、倭人伝や卑弥呼のことを熱っぽく語っておられたことを思い出す。お話の内容はまったく憶えていないが、口角あわを飛ばす独特の語り口だけは、はっきりと脳裏に焼きついている。

その後、大学生のころであろうか、私の母校に歴史の教諭として勤務されるようになった原口正三先生とも、地歴部OBとしてお付き合いが深くなった。原口先生からは、私の学問だけでなく人生にとっても、実に多くのことを学び、かつ、激励していただいたが、印象に残るお話の一つに邪馬台国近畿説があった。御説の論拠は、やはり完全に忘れてしまっている。ただ、先生は倭人伝だけでなく、韓伝もいっしょに読まねば駄目だとおっしゃっていたように思い起こされる。後に私が東夷伝全体を読むように心がけるようになったのは、そのときの原口先生のご教示が頭の片隅にあったからではないかと、ときどき思うことがある。

ところで、昭和四十四年（一九六九）四月に私は、奈良国立文化財研究所から、新たに発足した福岡県教育委員会文化課に転出することになった。奈良から福岡への赴任に当たって、同僚の佐藤興治氏には、ご親戚を通じて部屋探しをして下さるなど、ずいぶんお世話になった。それはともかくとして、私は、佐藤氏に九州へ行って邪馬台国を探してみるといったところ、北九州出身の氏は、九州に邪馬台国などあろうはずはないと一蹴されたことを思い出す。

